「表裏頭脳ケンイチ」

第８話「始まりの再来と終焉の訪れ」

隆「お疲れさんっしたぁ！！」

メディア部のムードメーカーによるその号令で、部員たちと鳩谷は紙コップに入れたジュースで乾杯をする。春休みを目前に控えた２月２４日のメディア部部室である。

鳩「まったく、こんな時期までよく頑張ったな響鬼。」

口に運んだ紙コップを離して、そう感心する鳩谷。

晶「いや、頑張るしかないでしょ？受験は推薦で１２月には結果出せたし、第一、他の部活に合わせて早い時期に引退なんかして、コイツらを放っておくのも不安でしたしね。」

冗談交じりにそう言う晶に、龍路もどこかふざけながら話し出す。

路「じゃあ、放っておいて一番不安なのは誰なんですか？」

海「あ、それ気になるかも！ねえ誰なんですかぁ？」

そんな２人に、晶はどこかいたずらっぽく笑う。

晶「ん～？そんなの決まってんだろ？……」

そう言って晶が見たのは……

修「ちょ、ちょっとなんで僕なんですかぁ（泣）」

言われた本人は冗談では済まなかった修丸。

隆「そりゃ、お前は部活一のビビリだかんなぁ！」

修「び、ビビリの何が悪いんですか！！」

陽「あ、珍し～！修丸くんが強気に出たわ！」

修「珍しいってひどいなぁ……これでも、センパイに怒鳴られまくったおかげか、入部した時よりはずっとビビり屋じゃなくなったんですよ？なのに何を持って不安だと言うんですか？」

陽の言った通りに、どこか強気な修丸。

孝「そりゃお前、来年度の後輩にも舐められないかってことだろ。…ですよねセンパイ？」

晶「おうよ、まったくもってその通りだ。」

修「え、僕そんな後輩に舐められてなんか……」

そう言って不安げに賢一を見る修丸。見られて苦笑いをする賢一。

賢「いや、その……えっと……」

陽「だってヨシくんはいい子だもの。」

当たり前、といったふうに、珍しく修丸の敵にまわる陽。

路「てか、賢一はいいとして、すでに舐められてることに気付いてなかったのか？」

そう言いつつ龍海を見る龍路に、龍海がむくれる。

海「何ソレぇ！僕だってセンパイのこと舐めてなんかないもん！」

修「……中学生も後輩に入るんでしたね（汗）」

龍海の言い分を無視してショックを受ける修丸。

海「うわぁ、修丸センパイひどい！僕、ずっと修丸センパイの後輩のつもりだったのにぃ……」

そう言って涙目になる龍海の頭を、お約束のように撫でてやる龍路。

路「泣くな、泣くな。…あと１ヶ月ちょいもすればちゃんとしたここの部員になれるんだから、そしたら修丸にも後輩って認めてもらえるさ。」

海「うぅ……」

修「いや、認めてないとかそういう訳では……」

鳩「こら湯堂、今日は響鬼の引退祝いなんだぞ？なぁに勝手に主役になってるんだ？」

修「え？！いえ、僕そんなつもりじゃ……」

晶「わあってるっての！…お前は本当にビビリだなぁ！」

楽しそうに、そして嬉しそうにそう言う晶。そして修丸以外の全員がそれにつられて笑いだす。

鳩「でも、冗談は抜いても、よく１年間も一部活の部長を務めてくれたな。たいていは受験前に引退して勉強に専念するもんだが、本当によく頑張った！」

晶を褒める鳩谷に、晶は遠慮がちに言う。

晶「いえ、どっちかってったら部長やってたおかげで推薦入試できたもんですし、それで大学も受かったんだから、メディア部様々といいますか、その……」

そして、どこか照れくさそうに部員たちを見回す。

晶「それに…部長とか後輩とか顧問とか、そーいうの関係なしに、自分、ここが大好きですから。正直言ったら自分のわがままで今まで部長やってたようなもんですからね。」

そんな晶に、後輩たちもみな嬉しそうである。

晶「と、なんだか名残惜しい空気にしちまったが……」

急に真面目にそう切り出す晶。そして、部屋の隅にあるホワイトボードまで歩いて行く。ホワイトボードには、なぜか普段は張っていない大きめの模造紙が、マグネットで張ってある。

晶「そろそろ、メインイベントに行こうか！」

そう言いながらホワイトボードを見晴らしのいい場所に持ってくる。そんな晶を、部員たちも急に真面目な顔になって見ている。

孝「いよいよだな。」

路「ああ。今年は５人もいるもんな。」

陽「ホント、今期は学年の偏りひどかったもんね。」

修「去年とはまた違った緊張ですよ……！」

隆「んじゃ、センパイたのんまーす！」

どこかわくわくしながらそう話しあう２年生たちを、龍海と賢一も楽しそうに見ている。

晶「では！」

そう言って、晶はマグネットのついていない、模造紙の下を思いっきり引っ張った。

「新部長　佐武龍路

　まあ、よろしく頼む。ｂｙ旧部長　響鬼

　まあ、頑張ろう。　ｂｙ引き続き顧問　鳩谷」

ホワイトボードにはそう書かれている。

晶「来年度のメディア部部長には、写真、カメラ担当、佐武龍路を任命する！」

その宣言に、言われた本人はどこか驚きを隠せず、他のメンバーはどこか納得するような顔もしている。

海「すごい！部長だよ？兄ちゃん部長だよ？！」

まるで自分のことのように喜ぶ龍海に、龍路は少し困惑気味である。

路「あ、ああ……」

晶「どうした？…もしかして部長は重荷か？」

少し心配気味にそう言う晶に、龍路は苦笑して言う。

路「いえね、別に重荷とかじゃないけど、俺はてっきり、判断力のある孝彦が部長かなぁって思ってたもんで。」

孝「何言ってんだ？俺はお前だろうなって思ってたけどな。ブラコン除けば、俺らの中じゃ１番まとめるのがうまいからさ。」

しれっという孝彦に、隆平も続く。

隆「俺は陽かと思ってたぜ？…センパイとのギャップはあるけど、穏やかな部長もいいかなぁってな！」

晶「悪かったな、穏やかじゃなくて……」

隆「あ、いや！そーじゃなくてですね……えとぉ…お、お前らはどう思ってたんだよ？」

本気で嫌そうな顔をした晶に、隆平は慌てて話題を修丸や陽に振る。

陽「私も、やっぱ龍路くんかなって思ってたな。」

修「僕は、誰がなっても納得だなぁ、と。あ、もちろん僕以外のね（汗）」

そんな中、晶がまた仕切り直す。

晶「ちなみに新部長の決定については、自分と鳩谷先生でみっちり話し込んで決めた結果だから、決して安易な決定ではない。よって、安心してくれ。」

そして、晶はどこか嫌味っぽく龍海を見る。

晶「いいか龍海？中学生にしてここまでこの部活に入り浸ったんだ。……他の部活なんかに入ったら許さんからな！」

海「まっさかぁ！兄ちゃんが新部長なのに、他の部活なんてキョーミありませんよ！」

龍海は、どこか嬉しそうである。そんな龍海を見て、晶もフッと嬉しそうに笑う。

晶「それもそっか。……しっかし、龍路が卒業したら辞めちまいそうで怖いな（汗）」

海「ちょっとぉ、僕ってそんな薄情に見えますぅ？」

晶「いや、タダのブラコンにしか見えん。」

きっぱりと断言する晶に、なぜか龍海も含めて全員が大笑いする。そんな中、隆平が晶にコップを向けた。

隆「んじゃま、新部長の発表も終わったことだし、ジャンジャン飲みましょーやセンパ～イ！」

しかし、晶はどこか申し訳なさそうな顔をしてちらりと陽を見る。

晶「ああー、いや、悪いけど今日はこれから、ちょっと用事が…な？」

晶に見られた陽も、申し訳なさそうに苦笑している。

賢「用事ですか？……もう少しゆっくりとかは……」

寂しそうな賢一に、晶は優しく、しかし強気に笑う。

晶「何しんみりしてんだよ？…引退っつったって、ま～３月号の記事が完成したから区切りって感じで今日引退するだけでさ、お前らが鬱陶しくないんだったらもう少し遊びには来るつもりだよ。」

修「そんな、鬱陶しくなんかないですよ！」

驚いてそう言う修丸に、晶は嬉しそうに笑う。

晶「そっか？ありがとな。」

そう言って荷物置き場に歩いて行く晶。

晶「ほら、行くぞ陽。」

陽「あ、はい。」

そう言って陽も荷物置き場に向かうが、男たちは皆不思議そうな顔をしている。

鳩「なんだ、宗光も用事か？」

陽「ええ、ちょっと。」

晶「女同士で、ちょっとね。」

いたずらっぽくそう言う晶に、陽は苦笑している。

晶「んじゃ、また明日な！」

陽「ヨシくん、ちょっとだけ遅くなるけど、ご飯までには帰るってお父さんに言っといてね。」

賢「あ、うん……」

陽の言伝に、不意を突かれたように小さく返事をする賢一。その間に２人は部室を出て行った。

隆「なんつーか、あの一件以来センパイ変わったよな。」

孝「そうだな……前までは無理して男っぽくしてるとこはあったけど、今はなんか、ボーイッシュはそのままだけど、普通に女の子らしい感じがするってか、な。」

修「自然な感じで、見ていてホッとしますよ。久島さんの本心がわかって、センパイも肩の荷が下りたんでしょうね。」

穏やかにそう言って、修丸は賢一を見る。

修「ケンイチくんには、本当に感謝ですね。センパイが無理に強がる原因を解決してくれたんですから。」

そう言う修丸に、鳩谷も感心するように言う。

鳩「まったくだ。……しかし不思議だな。彼が現れてからは、お前たちはみんなどこか変わった気がするよ。湯堂は口裂け男の一件からはどこか臆病が抜けてきてる気もするし…」

そう言われ、修丸は照れくさそうに笑う。そして孝彦を見る鳩谷。

鳩「幾永は、夏休みの一件から協調性が増したよな。」

孝彦は修丸とは対照的に、照れを隠そうと鳩谷から目線を逸らす。それに苦笑して、次は龍海を見る鳩谷。

鳩「さた…いや、龍海クンは夏休み明けに事件を目撃をした時から、兄離れも始まったし……」

どこかわざとらしく龍海の名前を呼んでそう言う鳩谷に、隠すことなく嬉しそうな顔をする龍海。次に隆平を見る鳩谷。

鳩「近宮も、梶北くんの家での事件で、責任感が人一倍強くなった。」

隆平も、龍海同様に特に嬉しさを隠すことなく、素直に笑顔になっている。次は龍路を見る鳩谷。

鳩「佐武も、写真スタジオでの事件からは一方的に頼られるだけじゃなくて、人を頼ることもできるようになったしな。」

そう言われ、龍路は少し恥ずかしそうに苦笑する。それから鳩谷は晶と陽が出て行った部室のドアを見る。

鳩「響鬼も、さっきお前たちも言っていたが、久島くんの誤解が解けて、無理をすることもなくなった。」

そして、最後にどこか苦笑気味に賢一を見る。

鳩「まあお前たち姉弟は、彼が現れてからもあまり変わってはいないな。」

そんな鳩谷に、賢一も苦笑し返す。

賢「そんなこと言われたって……」

そんな賢一の頭を、鳩谷がまるで龍路と龍海のように優しく、しかしクシャクシャと撫でてやる。

鳩「すまんすまん！お前たちは今のままでも、全然大丈夫だよ。」

賢一も、そんな鳩谷をどこか嬉しそうに、しかし苦笑して見る。

賢「今のままでもって言っても……確かにひなは今のままでもいいでしょうけど、僕の頭の悪さだけは、なんとかしたいんですけどね…」

そう言う賢一に、みな苦笑気味に笑っている。そんな中、ふと賢一は不思議そうに先ほど鳩谷が見ていた、部室のドアを見る。

賢「だけど…ひなの用事って何だろう……」

先ほどの笑いから一転して、不思議そうにみんなして部室のドアを眺めたのだった。

一方、メディア部女子（…？）は、学校の近くにある、天然石の専門店に来ていた。

晶「で、例のXデイはいつだっけ？」

陽「Xデイって……（汗）まあ、実際の誕生日はわかんないんですけど、ヨシくんがうちに来た日を誕生日にしてるんです。それが２月２７日で。」

２人は目当ての売り場に行くまで、賢一の誕生日の話をしていた。

晶「しっかし、弟の誕生日に手作りブレスレットとはお前も乙だな！しかも天然石とは凝りやがって、この！」

どこか嬉しそうに陽を小突く晶に、陽も嬉しそうである。

陽「天然石って言っても、アクセサリ用の買いやすいやつですけどね。」

晶「プレゼントは値段じゃないさ。大事なのは、気持ちだろ？」

そう言って、軽く胸を叩いて見せる晶。

陽「そうですよね。……でもセンパイ、ありがとうございます。引退早々、私のわがままに付き合ってくれて……」

晶「なに、自分も男どもにゃ恥ずかしいから言わないが、こう見えて手芸とかは好きだからさ、賢一のプレゼント用の石選びを手伝ってほしいって相談してくれた時、すげー嬉しかったよ。」

言葉通り嬉しそうにそう言う晶。そして、どこか楽しそうな顔をする。

晶「で、何種類ぐらい選べばいい？」

陽「えっと、種類は３つ欲しいんです。ざっくりで悪いんですけど、「前に進む」って感じの石と、「自分を信じる」とか…それから、「希望」…かな？」

晶「オッケ！じゃあ、自分はあっち探してくる。」

陽「お願いします。」

そう言って、陽は晶とは違う方の売り場に歩いて行った。

それから数分後、陽は２つの石のセットを手に取って、他の石を探していた。

陽「あ……」

ふと、まるで惹かれるように陽が手に取ったのは「サンストーン」だった。

「サンストーン　意味：希望の光」

陽「サンストーン……太陽の石、か……」

そうつぶやいて、陽はどこか優しく微笑む。

陽「これ、いいかも……」

晶「どうだ？いいのあったか？」

後ろから、４つほどの石のセットを持った晶が声をかける。

陽「ええ、３つくらい。」

そう言って陽は、「インカローズ（前進）」と「イエローサファイア（ポジティブ思考）」、「サンストーン」のセットを見せる。

晶「んっと、「前進」に「ポジティブ」、それに「希望の光」か…なんだ、自分の手伝いなんかいらなかったんじゃないか？」

陽「いえ…欲しい意味と似た石は見つけたけど、ピンポイントじゃなくて……センパイの方はどうでした？」

晶「ああ。ほら、こんなの見つけたぞ。」

晶が見せたのは、「トリフェーン（希望を見つける）」「プレナイト（本当の自分を見つける）」「ブラッドストーン（自身を持つ）」「グリーンサファイア（自然な自分）」である。

陽「あ、これすごくいいです！」

そう言って陽が手に取ったのはプレナイトだった。

晶「それ、一応「自分を信じる」に近いかなって思ったんだけどさ。」

陽「いい感じです！これ、買って行こうかな。」

そう言って、陽はインカローズとプレナイトを１セットずつ、サンストーンを２セット手に取る。

晶「お、その組み合わせいいんじゃないか？色もいい感じだし、サンストーンなんか名前的にお前らしいしな。」

そう言う晶に、陽は少しだけ恥かしそうに言う。

陽「ええ…私の名前、お日様みたいに暖かい心を持ってほしいってことで、陽なんですって。…私からのプレゼントだから、お日様の石っていいなぁって。」

晶「賢一の奴、きっと喜ぶぞ？……だけど、なんでサンストーン２つも買うんだ？…名前的に気に入ったか？」

不思議そうな晶に、陽は少し笑ってみせる。

陽「ふふ、内緒です！」

そんな陽に、晶も「やれやれ」という顔をした。

晶「こいつ！」

そう言ってまた陽を小突く晶。そして、力強く背中を押す。

晶「ほら、没った石は戻してきてやるから、レジ行って来い！」

陽「ありがとうございます。」

礼を言って、陽はレジへと向かった。

晶「ったく…姉弟じゃなくて、まるで恋人同士だな。」

陽の背中を見てそう言う晶は、どこか子供の成長を見守る親のような顔をしていた。

その日の夜、２１時を過ぎた頃、陽は自分の部屋にこもって晶と一緒に買った天然石に、今まで賢一に内緒で作っていた細めのミサンガを通していた。

陽「（もう、１０年になるんだね……）」

そんな想いの中で陽は、賢一は宗光家に来てから１年後のこと、今から９年前の２月２７日のことを思い出す。

―賢「ねえひな、そろそろ帰らないと、お父さん帰ってきちゃうよ？」

　夕暮れの公園で遊んでいた、当時小学１年生の賢一と、２年生の陽。２人は緩やかにブランコをこいでいた。そんなブランコを静かに止めてそう言う賢一に、陽は公園の時計を見ながら、ブランコをこぐのを止めずに言う。

　陽「あとちょっと！今日はいっぱい遊んで来ていいってお父さん言ってたんだもん。」

　賢「ホント？じゃあもっと遊ぶ！」

　嬉しそうに、再びブランコをこぎ出す賢一。

　陽「うん！」

　５時過ぎ、２人は家の玄関を開ける。そこには陽一郎の靴があった。

　賢「あ、やっぱお父さん帰ってる……」

何処かバツ悪そうにそう言う賢一を、陽はなぜかくすくすと小さく笑って見ている。

　陽「ホントだね！……「お帰り」と「ただいま」言いに行こっか？」

　賢「うん。」

　陽にうながされ、賢一はリビングへのドアを開ける。すると……

　父「賢一おめでとう！！」

　父の声と共に鳴り響くクラッカーの音と、家を出た時にはなかった飾りが、賢一を迎えた。

　賢「……？」

　驚きのあまり何も言えずにいる賢一に、陽が嬉しそうに言う。

　陽「今日はね、ヨシくんがひなたの弟になってちょうど１年なんだよ！」

　賢「あ！」

　言われて思い出した賢一。

　父「お前、自分の誕生日もわからないだろう？だから陽と相談してな、今日を賢一の誕生日にしようってことにしたんだ。……改めて、７歳おめでとう、賢一！」

　そう言われ、照れくさそうに笑う賢一。

　賢「ありがとう！」

　陽「よかったねヨシくん！」

賢「うん！……ぼくね、ずっと誕生日がほしかったんだ！」

父「そうか！そいつは良かった！ほら、今日はお父さん、早くお仕事終わらせておいしい物たくさん作ったんだぞ？お腹いっぱい食べてくれ！」

　陽「ひなたもいーい？」

　父「それは賢一に聞きなさい！」

　陽一郎にそう言われ、陽は嬉しそうに賢一に聞く。

　陽「ねえ、ひなたもいっぱい食べていーい？」

　賢「うん！ぼくだけじゃ食べきれないもん！」

　陽「やったぁ！」

　そんな子供たちを、陽一郎はとても微笑ましく見守っていた。―

そんな思い出の中、陽はふと寂しそうな顔をする。

陽「（きっとあの頃も記憶がないことが不安だったのに……なんで今頃まで気付いてあげれなかったんだろう……）」

その時、ドアをノックする音が響き、陽は慌てて机の上に出していたパワーストーンを引き出しの中に隠す。…その時に一粒のサンストーンが廊下に転がったことに、陽は気付いていなかった。

陽「はーい！」

賢「あ、僕だけど入るよ？」

陽「どうぞ。」

小さな驚きを隠しつつ、陽は賢一を部屋に入れた。賢一は手にカップを２つ持っている。

賢「ココア作ったんだけど飲む？」

陽「あ、飲む。ありがとう。」

そう答える陽の机に賢一はカップを１つ置き、ついでと言わんばかりにベッドに座る。

賢「ねえ、用事って何だったの？」

陽「え！」

急な質問に驚く陽だったが、賢一は優しく言う。

賢「ほら、部活の途中で出てったじゃん。やっぱあれ？センパイに引退のプレゼントとか？」

その言葉に、陽は少しだけ慌てた様子で言う。

陽「そ、そうなの！センパイってああ見えて、結構かわいいものとかも好きみたいでね、そーいうの部活であげて、みんなに見られるの恥ずかしいかなって！」

賢「ふ～ん……そっか、プレゼントかぁ。いいなぁセンパイ…」

まるで小さな子供のようにそう言う賢一に、陽は思わず小さく微笑む。

陽「あら、何？ヨシくんも何か欲しいものでもあるの？」

少しだけ冗談交じりにそう訊く陽に、賢一は少しだけうつむく。

賢「……いや、これからもひなと一緒だったらそれでいい。しいて言えば、ひなとの時間が欲しいかな？それ以外は、何も……」

そんな賢一を見て、陽は急に不安な気持ちに襲われた。しかしそんなことを悟られまいと、すぐに明るく言う。

陽「何言ってるの？…私たちはずっと一緒。姉弟なんだから！」

そんな陽を、賢一はどこか不安げな笑顔で見る。

賢「そう、だよね…ごめんね、変なこと言って。」

陽は、ただ優しく賢一を見ている。

陽「ううん。……ヨシくんに、私と一緒だったらそれでいい。なんて言ってもらえて、私もすごく嬉しいもん。」

そんな陽を、賢一は不安が消えた笑顔で見た。

賢「ホント？…ならよかった。」

そう言って賢一は立ち上がる。

賢「じゃあ、僕今日はそろそろ戻るかな。じゃあね。」

陽「うん。ココアありがとね。」

礼を言う陽にニコリと笑い、賢一は自分のカップを持って部屋を出る。

賢「（あれ……なんだろ、これ？）」

そして、ドアを閉めてすぐに落ちているサンストーンに気付く。

賢「（ビーズかな？それにしたら綺麗だけど……）」

空いている片手でサンストーンを拾い、廊下の電灯にかざす賢一。

賢「（優しい色だな……なんか、ひなみたい。）」

そう思うと同時に、思わず笑顔がこぼれる賢一。

賢「（これ、ひなのなのかな？……）」

そして、賢一はサンストーンを着ていたパーカーのポケットに入れた。

賢「（だとしても、返すの明日でいっか。）」

そして賢一は部屋へ戻って行った。

陽「（はあ、びっくりしたぁ……あとちょっとでできるのに、見られたら意味ないもんね。）」

そう思って引き出しからミサンガと天然石を出す陽。そして念のために石の数を数える。

陽「あれ？」

思わず声に出てしまう。サンストーンが一粒足りなかった。

陽「（どうしよう……さすがにもう１回買い物に行ったら、バレちゃいそうだし……）」

と、その時陽の携帯が鳴る。

陽「あ…（誰からだろう……）」

ふと携帯を見て、陽はどこか安堵の様子を見せて返信をうちはじめる。そのメールが、始まりの再来を告げるものだとも気づかずに……

？「ヨシくん……」

真っ暗な空間…何もかもが闇に包まれ、ただ静かに雨だけがふる空間で、誰かが賢一を呼んでいる。

賢「誰…？ひな……？」

？「ごめんね……雨、降ってきちゃったね……」

その時、賢一はハッと前に見た夢を思い出す。

―？「雨に変わるまで、そばにいてあげるから……」―

賢「もしかしてこの声……あの夢の……」

賢一がそう思った時だった。

？「さようなら、ヨシくん……」

賢「え…？待って―」

ケ「追うな。」

思わず声のした方へ行こうとした賢一を、誰かが止める。思わず振り向いた賢一は驚いた。そこには、目つきの鋭い自分自身が立っていたからだった。

賢「君は……」

ケ「フン……こうして会うのは、初めてか……」

賢「ケンイチ……」

ケンイチは、賢一と入れ替わっている間、賢一が心の中で外の様子を見ている間は鏡や水面、硝子などの自身の姿を反射する物を意図的に避けてきていた。つまり、ケンイチが言う通り、賢一はこの時初めて、自分の中のもう１つの存在と対面したのである。

賢「追うなってどういうこと？……あの声は、ひなじゃないの？」

ケ「……」

ケンイチは、静かに目を閉じるだけで何も言わない。

賢「ケンイチ……ねえ―」

ケ「あの声は……オレの……いや、お前の大事な人間の声だ。」

目を開け、悲しげな瞳でそう言うケンイチの言葉に、賢一も悲しそうな顔をした。

賢「僕の、大事な人……？」

ケ「いいか？……何が起きようと、気を強く保て。」

そう言って、ケンイチは振り返る。

ケ「宗光はお前の強さを信じている。…応えろ。応えられないのなら、オレがお前を…神童賢一を殺してやる。」

賢「…どういうこと―」

賢一の問いに答えようともせず、ケンイチは歩き出した。

賢「待ってよ！ケンイチ！！」

止めようとする間もなく、ケンイチの姿は闇の中に消えていく。その闇の中に、ケンイチを止めようとした賢一の声が虚しく響き渡る。そして、一瞬で闇が消えたかと思った瞬間……

賢「……！」

ケ「乗り越えろ、賢一……過去の因縁も、自らの過ちもな……」

脳裏に響くケンイチの声とともに、洪水のような大量の水が賢一に向かって流れてきた。その水の向こうに、賢一はうっすらと、半月を見た気がした。

賢「！」

賢一は目を覚ました。ケンイチと出会った空間…夢から覚めて、現実と夢が混ざり合いかける中、時刻はまだ夜中のようで、部屋の中は真っ暗である。

賢「雨と半月……」

小さくそうつぶやき、賢一はカーテンを開ける。そこには、薄雲の合間に顔を出す半月が輝いていた。

賢「（なんで…いつも雨と半月なんだろう……）」

そして、賢一はふと思いついたように、机の引き出しを開ける。そこには賢一がずっと大事にしている、名前の刺繍が入ったハンカチが入っていて、賢一はそれを手に取った。

賢「（まだ残ってる……）」

賢一がそう思ったのは、いつかケンイチがこのハンカチに落とした涙の痕だった。

賢「雨、か……」

そうつぶやいて、賢一は胸に手を当てた。

賢「（もしかして夢で降っているのは……君の涙なのかな……）」

心の中でつぶやく賢一。その声が彼に届いていることを、賢一は知らなかった。

ケ「（バカが、オレの涙なんかじゃねーよ……あの雨は、オレの涙なんかじゃ……）」

賢一には聞こえない、心の奥底でそうつぶやくケンイチ。その声は、どこかひどく悲しさを秘めているようだった。……開けたカーテンから入る月光が、机の上に置かれたサンストーンを照らしていた。

翌日、いつものように賢一の漕ぐ自転車の後ろに乗って登校していた陽は、ふと自然を装って聞いてみる。

陽「ねえ、ちょっといい？」

賢「ん？何？」

陽「あのね、うちの中でビーズみたいな石、見なかった？オレンジ色で結構小さめなんだけど……」

賢「オレンジの？……あ！」

少し考え込んだあげくに急に声を上げる賢一に、陽は内心ひやりとする。

陽「心当たり、あるの…？」

少し不安げなその声に賢一は気付かず、バツの悪そうな声で言う。

賢「いや、昨日２階の廊下でそんなビーズみたいなの拾って、僕もひなに訊かなきゃなって思ってたんだけどさ……今朝また不思議な夢見ちゃって、それが気になってて話すの忘れてた…」

陽「夢……？それって、半月と雨の……？」

先ほどとはまた違う不安の色を見せる陽。

賢「うん……あと、今日はケンイチにも会った。」

陽「ケンイチくんに…？！」

なぜか驚く陽に、賢一は見られてはいないものの、とてもさみしそうな顔をした。だが、そんなことを悟られまいと、賢一は調子を変えないように努める。

賢「今日の夢でいた場所は、いつもみたいに雨は降ってるんだけど、真っ暗で何も見えない場所だった。そこで、前に見た夢で一緒にいた人の声だけが聞こえるんだ。…その人が「さよなら」って言うから、慌てて追おうとしたらさ…後ろから「追うな」って言われて、振り向いたら……」

陽「ケンイチくんがいたの？」

賢「……。直接姿を見たのは初めてだったけどね。それで、その声の人が僕の大事な人だってことと、何が起きても、気を強く保てって言ってた。それから……」

そう言って、賢一は口ごもる。

―ケ「宗光はお前の強さを信じている。…応えろ。応えられないのなら、オレがお前を…神童賢一を殺してやる。」―

陽「それから？」

賢「（僕を殺すって…どういうことなんだろう……）」

顔の見えない賢一が黙り込んだことに、陽は不思議がる。

陽「ヨシくん…？」

賢「あ、ごめん…なんでもない。」

どこか陰のあるその声に、陽はまた不安の色を強める。

陽「そう……」

そして、話題を変えようとする陽。

陽「あ、それでさ、そのビーズって今持ってたりする？」

そう言われて、賢一もまた声の調子が戻り、先ほど同様にバツの悪そうな顔をしている。

賢「いや……僕の部屋……（汗）」

陽「そっかぁ……」

残念そうな陽に、賢一は不思議そうに訊く。

賢「やっぱ、早めに返した方がいいよね……あれ、大事な物だったりするんでしょ？」

そう訊かれて、陽はまたひやりとする。

陽「あ、いや…！大事って言うか……その、前に道で拾ったの！すごくきれいだったから！それで気に入ってはいるけど、今すぐに返してほしいって訳じゃなくて……ちょっと気になってただけで……」

咄嗟に言い訳をする陽だが、そのことには気付かない賢一。それから、賢一はホッとしたように言う。

賢「そっか。…じゃあ、返すのは今日家に帰ってからでもいい？」

陽「うん、ありがとう。じゃあ帰ったらお願いね。」

そして、陽は安心したように小さく笑った後、少し間をおいて冗談めいて言う。

陽「そう言えば、宿題ちゃんと終わらせた？」

賢「……」

陽が切り出す話題に、賢一は人知れず冷や汗を垂らす。

陽「どうなの？」

賢「……まだ（汗）」

陽「……冗談抜きで、留年しても知らないからね（呆）」

賢「だってさぁ……」

ほぼ毎日、恒例となった宿題の話をしながら、２人は学校へと向かった。この時間が、２人の「当たり前」の、最後だとも知らずに……

放課後、メディア部の活動が始まる時間になっても、なぜか陽の姿が見えなかった。

晶「おい賢一、お前ホントに何も聞いてないのか？」

賢「ええ、特に何も……」

心配そうな賢一だったが、ふと隆平が呆れるように晶を見る。

隆「にしても、なんかおかしい光景ッスね（汗）」

孝「何が？」

いつものように、本を読みながら目線もずらさずにそう訊く孝彦。

隆「だってよ、引退したセンパイが当たり前のようにここにいて、滅多に部活休まない陽がここにいないんだぜ？」

修「でも、それ言ったら龍海くんは……？（汗）」

そう言ってチラッと龍海を見る修丸に、龍海はむくれて見せる。

海「うわぁ、センパイ昨日からなんかひどいですぅ！」

路「お前、そんなに龍海が嫌いか？」

なぜか真面目な顔で修丸にそう言う龍路に、修丸は慌てる。

修「な、なんでそうなるんですかぁ！」

そんな修丸に、龍路はすぐに苦笑する。

路「バカ、冗談だよ。」

そう言って、龍路は話しながら部品のネジを巻きなおしていたカメラを首にかけて立ち上がる。

路「そろそろ活動時間だし、とりあえず先生呼んでくるよ。…もしかしたら先生、陽のこと聞いてるかもしれないしな。」

そんな龍路を、晶は頼もしそうに見ている。

晶「お、ちゃんと部長の仕事は見てたみたいだな。」

路「ええ、もちろん。んじゃ、行ってきますね。」

そう言って部室を出て行く龍路を、賢一は不安そうに見ている。

隆「んだよ賢一、辛気くせぇ顔してよぉ。」

賢「え、僕そんな顔してます…？」

無意識だろうが、どこか心配そうな口調の賢一。

孝「あんま心配しすぎても疲れるだけだぞ？…授業中に体調崩して保健室で寝てるとか、家に帰ったって可能性だってあるだろ？」

孝彦が、隆平の時とは違って本から目を離して賢一を見ながらそう言う。

海「そうですよ。家に帰ってても、賢一センパイって携帯ないから連絡も取れないですもんねぇ。」

賢「そう、だね…」

賢一を元気づけようと明るくそう言う龍海に、賢一は心配そうな顔でだが、小さく微笑む。

晶「知ってるか？しなくてもいいような心配を「杞憂」って言うんだと。今のお前はまさに杞憂してるだけさ。」

隆「へえ～、センパイ頭いいッスね！」

晶「ん、そーか？」

修「センパイって、現文とか得意なんですか？」

晶「いや、得意なのは数学かな。…文系科目はどっちかってたら苦手なんだけどさ。」

孝「意外ですね、センパイって理系か文系だったら、文系かと思ってましたけど。」

海「てゆーか、センパイの得意科目って体育じゃないんですかぁ？」

隆「バッカ、体育は俺のせん、えっと…せんばん？じゃなくて……」

孝「専売特許。」

気付けばまた本を読み始めている孝彦が、呆れたようにそう言う。

隆「それだ、それ！何とか特許！体育は俺の何とか特許だっつーの！」

修「あの、だから専売特許―」

と、修丸が言いかけた時、ドアが開いたかと思うと、修丸はいつものようにビビってしまう。

鳩「……（汗）何を驚いてるんだ湯堂……」

路「コイツのビビリは、死んでも治らないんじゃないですかね？」

鳩「確かに……」

入ってきたのは龍路と鳩谷だったが、真剣な顔でそう言う鳩谷に、修丸は慌てる。

修「もー！みんなして僕のビビリをネタにするのやめてくださいよぉ！」

晶「お前のビビリは、イジられるためのビビリだろうが。」

面白がるようにそう言う晶に、ふと鳩谷が嬉しそうに言う。

鳩「お、早速遊びに来るとは有言実行だな響鬼。」

晶「だって、暇ですからね。」

そう言ってから、ふと晶は不思議そうに龍路の方を見る。

晶「にしても、ずいぶん早かったな。」

路「いえね、職員室行こうと思って玄関の前通ったら、そこでバッタリ会ったもんで。」

鳩「ちょっと一服をしに外に出てたんだ。…この時期はいろいろと疲れるからなぁ。」

苦笑してそう言う鳩谷に、龍海が不思議そうな顔をしている。

海「いろいろって何ですかぁ？」

鳩「いろいろはいろいろだよ。…まあ、大人になればお前もわかるさ。」

海「あー、そうやって僕のこと子供扱いするぅ！」

修丸の時のように膨れる龍海の頭を、龍路がいつものようにくしゃくしゃと撫でてやる。

路「しゃーないさ。お前はこの中で一番年下なんだからな。」

海「でも、賢一センパイと１つしか違わないもん！ねえ？」

そう言って賢一を見る龍海だったが、それにつられて賢一を見た鳩谷は、彼の心配そうな顔に気付く。

鳩「ん、どうした神童？いやに暗い顔をして…」

賢「あの、先生って確かひなの担任ですよね？ひな、早退とかしてませんか？」

そう言われて、鳩谷は困ったような顔をする。

鳩「ああ、元気がないと思ったらそのことでか。……佐武からも宗光がまだ部活に来てないとは聞いたけど、俺も何も聞いてないんだよ。帰りのＨＲの時はちゃんといたんだが……」

賢「そうですか……」

孝「先生、陽の掃除当番ってどこですか？」

鳩「えっと……宗光の班は今日は購買の係だから、掃除はなかったはずだが。」

思い出すようにそう言う鳩谷だったが、ふと晶が立ち上がる。

晶「じゃあ、自分ちょっと２年のトイレ見てきます。……お前ら、誰か下駄箱でも見に行っといてくれ。」

修「あ、じゃあ僕行ってきます。」

そうして、晶と修丸は一緒に部室を出る。

その後に隆平がふと携帯を出す。

隆「メール…より電話の方が確実だな。」

と言いながら電話帳を開き、言い終わるや否や耳元に携帯を運ぶ隆平。しかし、コールが始まってから数秒の後に、難しそうな顔をして携帯を手元に戻す。

隆「なんだよ、電源入ってねーし……」

その様子を見て、賢一は少し言いにくそうに言う。

賢「あの……ひな、学校出るまではよっぽどのことがない限り、携帯の電源切ってるんです…ほら、校則だと学校に携帯持ってくるときは、学校内では電源を切るって……」

隆「はあ？マジかよ、それ……」

路「まあ、陽らしいっちゃらしいけど……」

賢「でも、電源入れてないってことはまだ学校にいるってことですよね……」

不安の色を増す賢一を、みな心配そうに見ている。

鳩「じゃあ、俺も一応、教室を見に行ってみるよ。あと、他の先生方にも宗光を見てないか訊いてくる。」

重い空気を何とかしようと、鳩谷も部室を出て行った。

孝「としたら、やっぱ考えられるのはトイレだな……センパイ戻るの待つか。」

と、その時隆平が小さく反応を見せる。

隆「お、噂をすりゃあどっちか帰ってきたぜ？バタバタ走ってやがるから修丸かな。」

海「へー！ホントすごいですね、地獄耳。」

隆「地獄耳言うなっての。」

隆平が怪訝そうな顔をした時、ドアが相手隆平の言う通り修丸が入ってくる。

路「どうだった？」

修「それが……上靴があって外靴がなくって……」

隆「はあ～？」

修「いや、だから…学校の中にはいないみたいなんです……」

賢「え……？」

修丸の言葉に、賢一はいよいよ不安の色を濃くする。そして、先ほどの電話の話を聞いていない修丸は考えるように言う。

修「もしかしたら、孝彦くんが言ってたみたいに早退して帰ったのかもしれませんね……」

その言葉に、部員たちはどこか複雑な顔をする。

孝「それが、さ…そうでもなさそうなんだよ。」

修「え？」

不思議がる修丸を見て、孝彦は賢一に目配せをする。

賢「さっき隆平センパイがひなに電話かけてくれて、それでひなの携帯の電源が入ってなかったみたいなんです。」

修「電源が？」

路「ほら、うちの校則にあるだろ？学校に携帯持ってくるとき、電源切れって。陽は学校出ないと携帯の電源入れないんだとよ……」

修「でも…そしたら外靴はなんで……」

と、その時また隆平が反応する。

隆「今度はセンパイか？…修丸、そろそろドア開くぜ？」

修「あ、ハイ…―っ！」

修丸が返事をしようと思ったその瞬間にドアが開く。いくら忠告があっても、晶のドアの開け方は少々乱暴なためにやはりビビる修丸。

晶「トイレにはいなかったぞ？一応全部の階の女子トイレを見たんだが…ん？修丸、下駄箱はどうだった？」

修「あ、それが……上靴があって外靴がなくって、その、学校の中にはいないみたいなんです。」

晶「なんだ、だったらやっぱ孝彦が言った通り―」

孝「でも、学校は出てないみたいなんです。」

晶の言葉を遮る孝彦。

晶「はあ？なんで……」

賢「隆平センパイが、さっきひなの携帯に電話かけてくれたんですけど、電源入ってなくって……ひな、学校を出る時に電源入れるんです。」

晶「ってーことはなんだ？……裸足で学校にいるってのか？」

修「だとしたら外靴はどうなんです……」

晶「それは……その、えっと……」

修丸の質問に困った晶だったが、ハッと思いついたように言う。

晶「あ！ほら、あれだ！きっと今日に限って電源入れるの忘れて帰ったんだよ！…部活出ないってことは、きっと具合悪いとかで、うっかりしててさ！」

そんな晶を、賢一は不安そうに見ている。

晶「賢一……」

晶は晶で、賢一を心配そうに見る。

隆「ったく、ほらよ。」

そんな賢一を見かねたのか、隆平が自分の携帯を賢一に差し出す。

賢「え？」

隆「お前、携帯持ってないもんな。これ使えよ？」

それから隆平は、心配するように優しく言う。

隆「学校終わってすぐ帰ったんなら、もう家に着いてるだろ？かけてみろよ？……俺、お前ん家の番号知らねーからさ！」

最後の方はどこか元気づけるように明るく言う隆平に、賢一は不安をぬぐいきれなくとも、嬉しそうに笑う。

賢「ありがとうございます……じゃあ、借りますね。」

隆平から携帯を借りて番号を押し、携帯を耳元に持ってくる賢一。

「～。～。～。ただ今、留守にしております。ご用件のある方はピーッとなりましたらご用件をお伝えください……」

父がいつも、家を出る時に設定している留守電のアナウンスを聞いて、賢一は再び不安の色を濃くして電話を切る。

路「どうした？出ないのか？」

心配そうにそう訊く龍路に、賢一はうなずく。

賢「留守電なんです……携帯の電源入れ忘れて、留守電切るのも忘れるなんてこと、今までなかったんですけど……」

ただただ不安げにそう語る賢一を、みな心配そうに見てあげるしか出来る事はなかった。

まだ、いつもの活動終了時間よりだいぶ早かったが、賢一は１人自転車を漕いで帰路についていた。

―鳩「教室にはいなかったし、どの先生もＨＲのあとは誰も宗光のことは見てないって……そうか、学校は出たらしいのに連絡が取れないのか……」―

自転車を漕ぎながら、賢一は修丸や晶が戻ってきて少ししたら戻ってきた鳩谷の言葉を思い出す。

賢「（ひな……どうしちゃったのさ……）」

―孝「あのさ賢一、可能性の話だけど…もし具合悪かったら、センパイ言ってたみたいに電源入れるの忘れたり、留守電切るのすら忘れることもあるかも知れないと思わないか？」

隆「そーだよ！ほら、家帰って寝てたんなら留守電だって気付かねーだろ？きっとそーに決まってる！」

路「賢一……不安ならさ、お前今日はもう家帰っていいぞ？それで陽が家にいれば安心できるし、いなくてもここよりはお前の家の方が帰ってくる可能性はデカいしさ。いいですよね、センパイ？」

晶「ああ。部長がそう言うんなら、その方がいいと思うぞ？」

そんな晶にも心配そうな顔のままの賢一に、隆平が「やれやれ」と言った顔をする。

隆「ほら、これ貸してやるからさ。」

そう言って、カバンから先ほど使ったものとは違う携帯を差し出す隆平。

賢「え、でもこれってセンパイの携帯…」

戸惑う賢一に、苦笑いの隆平。

隆「俺もなんで２個持ってるか自分でわかってねーんだけど、俺、携帯２個持ってんだよな。んでさ、そっちあんまし使ってねーから、陽のことでなんかわかったら連絡してやるよ。…お前もさ、もし家に帰ってましたぁ。とかいうことになってたらちゃんと連絡入れろよな。アドレス帳に「俺」って書いてあるの、これのアドレスと電番だからさ。」

「これ」とは、今隆平がポケットから取り出した、先ほど陽に電話をかけた携帯である。

賢「ありがとうございます……」

元気はなくとも、賢一はみなが姉を心配してくれているという事実を、嬉しく思っていた。―

鳩谷の言葉に続いて、賢一は部活での先輩たちとの話を思い出す。この時間に自転車を走らせている理由は、こういうことであった。と、その時……

「こらぁ！！危ねーぞ！！」

賢一はハッとして急ブレーキをかけた。相手も同じくブレーキをかけてくれたおかげでお互いに衝突は免れたが、賢一は考え事をしながら自転車を漕いでいたせいで、交通規制を守っていた車に衝突しかけてしまったのだった。

賢「す、すいません！！」

「ったく、気をつけろよな…」

そんな文句を言いながら、ドライバーは窓を閉めて発進する。

賢「（とにかく帰ろう……）」

賢一も、再びペダルに足をかけた。

父「帰ってこないな……」

賢「うん……」

陽が部活に来なかったその日の夜１９時半ごろ、陽一郎はリビングのカーテンの隙間からずっと外を見ていて、賢一はただ不安そうに隆平から預かった携帯に届いたメールを何度も何度も見直している。

「Time：2/25　16：57

From：俺

　Subject：おれおれ、隆平ｗ

　Text：…なんてふざけてる場合じゃねーけどさ、一応みんなにその携帯のアドレス教えといたから、なんかあったら連絡してくれるってよ。メールは題名に差出人の名前書けるけど、電話はそーもいかねーからさ、電話はとりあえず出るように！」

「Time：2/25　18：42

From：kmas-hbk.a@cocomo.me.jq

　Subject：響鬼です

　Text：響鬼です。あれから６時までは学校にいたんだけど、陽の奴、部活には来なかった。もし陽からなんか連絡とか来たら、こっちもまた連絡するよ。…不安だろうが、あんまり気をもみすぎるなよ？」

「Time：2/25　19：01

From：mikon-and-canama@hardbank.me.jq

　Subject：佐武兄

　Text：龍路だけど、もう誰かから連絡行ってるかな？陽、結局部活には来なかったよ。一応俺からも陽にメールしといたし、隆平もその携帯のアドレスを陽に送ってくれてたから、何かあったらそっちにも連絡行くと思うぞ。

追伸

龍海です！兄ちゃんの携帯から失礼します！

そのね、なんて言っていいかわかんないけど、キユウしすぎてもダメですからね！」

部活の仲間たちからのメールに、賢一は不安そうな顔をするだけである。

父「どうだ賢一…連絡は？」

賢「ううん……やっぱ、部活には来てないって……」

父「そうか……陽はふらふら遊びまわるような子じゃないからなぁ……」

そう言って、陽一郎はカーテンを閉める。

父「まあ、何か父さんたちに言いたくない用事でもあるのかもしれないし、明日になっても帰ってこなかったら警察に相談してみよう……お前も気を張りすぎて疲れただろ？そろそろ部屋で休みなさい。」

賢「うん、わかった……」

気乗りのしない返事をし、賢一は重い足取りで自室のある２階へと階段を上っていく。

父「そりゃ、心配だよな……こんなこと、今まで１度だって……」

自身も心配そうな顔をして、陽一郎は小さくそうつぶやいた。

賢「（大丈夫だよね……何かに巻き込まれてなんか……）」

そう願い、賢一は机の上に置いておいたサンストーンを手に取る。

賢「（これ、ちゃんと返せるよね……―！）」

その時だった。賢一の脳裏に、何かがよぎっていく。

―？「なあ賢一、なんで智香子はお前みたいな化け物に優しくするんだろうな？……まさか、お前たちが夜中にこそこそ何かしているのを、オレが知らないとでも思ってるのか？」

高圧的な男性が、小さな男の子にそんな言葉を浴びせつける。男の子は何も言わずにうつむいている。

「……」

？「なんだ、その態度は？……何が言いたいんだ？」

「別に、何も……」

うつむいたままの男の子に、男性はひどくつまらなさそうな顔をしてぶらぶらと部屋の中を歩きだす。

？「……ったく、智香子の奴がいないだけで息が詰まる―」

その時、家の電話が鳴りだした。その音に男性は嫌悪をあらわにして、面倒臭そうに受話器を取ろうとする。男の子はそれをただじっと見ていて……―

ケ「よせ、賢一！！」

賢「…！」

心の中で響くケンイチの声に、賢一は我に返る。そして何が起きたのかを理解しようとするが…

ケ「余計なことは考えるな……それ以上……過去に手を伸ばすんじゃねえ……！」

再び心の中に響く怒号に、賢一は戸惑いを隠せない。

賢「（でも…今のは一体―）」

ケ「黙れ！！」

ケンイチは、心の奥底で怒りと悲しみに満ちた声でそう叫んだ。そして次に言葉を発した時には、怒りは消えうせ、悲しみと焦りだけが残っていた。

ケ「関係ない…関係ないんだよ。智香子のことも、宗光がいなくなったことも……絶対に関係ないんだ！！」

必死なその叫びに、賢一は胸を痛めるように静かにサンストーンを握りしめた。

賢「（ごめん…もう気にしない……さっき見た光景も、忘れるよ……）」

賢一のその言葉に、ケンイチは何も答えなかった。何も、答えられなかった……

ケ「（許してくれ…智香子……）」

ケンイチのその思いを、賢一が気付くことはなかった。

翌朝、不安のためにろくに眠れなかった賢一は、６時過ぎにリビングに降りた。そこには、いつも朝食を作っているはずの父の姿が見えなかった。

賢「あれ……」

ふと、賢一は陽一郎の居場所に心当たりを覚え、いったん部屋に戻って上着を羽織い、もう１枚上着を手に取ってから１階に降り、玄関から外に出る。

賢「父さん……風邪ひくよ？」

心配そうにそう言った賢一の目の前には、昨日の夜とまったく同じ格好の陽一郎がいた。いつから降り始めたのか、深々と降る雪で頭や肩が白くなっている。

父「ん？…なんだ賢一か。……大丈夫だよ。」

賢「もしかして、昨日の夜からずっとここに…？」

陽一郎にかかった雪を払い、上着をかけてやる賢一。

父「いや、出たのはついさっきさ。……さ、ちょっと早いがご飯にするか。……まあ、今から作ればいつも通りの時間になるだろうけどな。」

疲れの中に無理に笑顔を作る陽一郎に、賢一は切なそうな顔をするだけだった。

土曜日という事もあって、朝食を終えた後も賢一は、とりあえず着替えだけしてリビングで休んでいた。…休んでいたと言うよりも、陽から、もしくは彼女に関する連絡を待っていた。

賢「父さん……警察に相談しようよ？これ以上待てないよ……」

昼も近くなった時、賢一は我慢が出来なくなったようにそう言う。その言葉に、賢一の隣に座っていた陽一郎は諦めるように立ち上がる。

父「そうだな……」

と、その時だった。

～♪～「俺」～♪～

賢一が握りしめていた隆平の携帯の着信音が鳴り、表示には「俺」、すなわち隆平からの着信であることが表示されている。賢一は、それを見て咄嗟に携帯を開く。

賢「もしもし！」

隆「賢一か？ってか賢一だよな？！賢一じゃない訳―」

孝「バカ！ふざけてる場合か？！さっさと用件話してやれよ！」

隆「バ…別にふざけてなんかねーし！」

電話の向こうからは隆平と、少し小さめではあるが孝彦の声が聞こえる。

賢「あの、隆平センパイと孝彦センパイですよね？……なにかわかったんですか？」

隆「いや、わかったってか、おかしなメールがきたんだよ！それも陽の携帯から、メディア部全員に一斉送信でさ！なんか晶センパイとか龍海にも送られてるっぽいぞ！」

賢「ひなの携帯から…？」

隆「ああ！「部室に来てください」って、ただそれだけ書いてあって……でもさ、文面的に陽っぽい気もするけど、陽じゃない気もするだろ？！」

賢「それで、センパイは行くんですか？」

隆「ああ、そりゃ…ってか、もう学校に向かってる！修丸も龍路たちも、学校に行くってメールくれてるし、たぶん晶センパイも行くと思う。…それにわかってるだろうけど、今孝彦も一緒なんだ！とにかくさ、お前も支度できるなら早く来い！」

賢「あ、はい！」

賢一の返事を合図にするように切れた電話を、賢一は緊迫した表情で見つめていた。

父「誰からだ…？」

賢「センパイ…携帯貸してくれた隆平センパイからなんだけど……メディア部のみんなに、ひなの携帯からメールがきたんだって！部室に来てくれって内容の……」

父「陽の携帯から？！」

驚く陽一郎に、賢一は不安そうにも力強くうなずく。

賢「ひなは、いたずらに人を不安になんかさせないよね……」

父「ああ……もしかして、事件か何かに巻き込まれたんじゃ……」

陽一郎がそう言うと、少しの沈黙が訪れる。そしてその沈黙を、賢一がうち破る。

賢「僕も、行ってくるよ……」

そう言って陽一郎を見る賢一に、陽一郎は戸惑うような顔をする。

父「賢一……」

賢「なんだか、嫌な予感がするんだ……今行かなかったら、もうひなに会えないような、そんな気がして……」

不安げにも力づよくそう言う賢一を見て、陽一郎は思わず彼を抱きしめる。それは、血の繋がりがないなんてことを感じさせない、父と息子の抱擁だった。

父「すまないな、賢一…父親の癖に、いつもお前に不安ばっかり押し付けて……俺がもっとしっかりしてれば、陽もいなくなったりは……」

賢「何言ってるのさ…父さんもひなも、僕が不安な時はいつだって支えてくれるし、ひなが帰ってこないことだって、父さんは悪くないよ……」

優しくそう言う賢一を、陽一郎は嬉しそうに見る。

父「お前は本当に優しい子だな……陽と同様、父さんの自慢の子供だよ。」

そして賢一の肩を、両手で力強く掴む。

父「陽のこと頼んだぞ、賢一……ただし、お前はただでさえ人より大きな不安を抱えているんだ。…無理だけはするな。」

賢「ありがとう……じゃあ、行ってくる。」

そう言って、賢一はソファにかけてあった上着を手に取った。

朝から深々と降り続く雪のおかげで自転車を出せなく、電話を受けてから走って２０分ほどで賢一が部室に来ると、そこにはすでに、晶や龍海を含めた部員たちが集まっていた。そして、みな不思議そうに、もしくは不安そうにホワイトボードの前に突っ立っていた。

賢「遅くなりました！！」

修「あ、賢一くん！」

賢一の声にみな、部室のドアの方を向く。

隆「お、早いじゃねーか！」

少し感心気味の隆平だったが、周りの緊迫感は薄れない。

孝「それよりも、これ見ろよ……」

そう言って孝彦が指差したのは、今まで全員で見ていたホワイトボードに貼られていた２枚の写真だった。それを見て、賢一は驚きを隠せない。

賢「え、これって……！」

その写真のうち、１枚はまるで隠し撮りをしたようなアングルの陽の写真だった。そしてもう１枚は、同い年くらいの男子と、小さな男の子と３人で写っている陽の写真である。

路「この写真、どう見たって隠し撮りだよ……本人が撮られてることに気付いてねー……」

晶「なあ、これってストーカーの仕業じゃないのか……？」

そう言う２人に、龍海が不思議そうに訊く。

海「でも、なんでわざわざこんなことするんですかね…部室に写真張ったり、僕たちをメールで集めたり……」

孝「ストーカーなんて、ほとんどがまともじゃねーからな。…そればっかりは本人じゃないとわからないよ……」

その言葉に、部員たちの間に緊張が走る。そんな中、修丸がもう一方の写真へと目を移す。

修「そっちの写真は隠し撮りではなさそうですね……一緒に写ってる人たちは知りませんけど……」

晶「大きい方は高校生くらいか？だとしたら陽の友達かな……」

と、その時だった。

賢「違う……」

晶「え？」

賢「ひなじゃない……」

そう言う賢一は、じっと隠し撮りでない方の写真を見つめていた。

隆「はあ？何言ってんだよ？どう見たって陽だろうが……」

賢「違うんです…この人、ひなじゃなくて……―！」

そう言いながら、賢一は再び昨日の夜に襲われた感覚と同じ感覚に襲われる。

―？「セルフタイマーって言ってさ、写真を撮ってくれる人がいなくても写真が撮れるんだ。…いや、君ならそんなことくらい知ってるか。」

しゃがんでそう言う高校生くらいの男子に、目線を合わせてもらっている男の子は優しく笑う。

「ううん、初めて知りました。」

そんな男の子に、高校生は苦笑いする。

？「そんなこと言って……」

そして、高校生は男の子の隣に立っている、同い年くらいの女の子……部室のホワイトボードに張られている写真に写っている、陽らしき女の子の方を見る。

？「なあ智香子、君はどう思う？…セルフタイマーなんて絶対知ってたよな？」

その言葉に、智香子と呼ばれた陽にそっくりな女の子はいたずらっぽく笑う。

智「さあ？…ヨシくんは気が遣える子だからね。」

そう言ってから、智香子は「ヨシくん」と呼んだ男の子に、高校生と同じくしゃがんで目線を合わせる。

智「でもね、私にはそんな気遣いしなくていいのよ？私は、何があってもあなたの味方だからね……」

そんな２人を見て、高校生はどこか寂しそうに苦笑する。

？「まったく、君らはまるで恋人同士だな。…ま、いくら賢一くんだって、さすがにその歳で恋愛感情なんて理解できてないだろう？」

その言葉に、ヨシくん、そして賢一と呼ばれた男の子はどこか表情を曇らせ、それを気付かせないかのように智香子が立ち上がる。

智「当たり前よ。…それ以前に私たちは―」―

その言葉の続きを聞けないまま、賢一は現実に戻ってくる。

賢「ちか……」

隆「ちか…？なんだ、それ？」

その言葉に、賢一は何も答えない。

晶「賢一、大丈夫か……」

晶の言葉さえ聞こえていない。そして、賢一は目の色を失っていく。

賢「そうだ……ちかは……僕が……―！」

そう言った途端、賢一は両手で頭を抱えた。

賢「ちかは僕が殺したんだ……！」

その瞬間、賢一は大きな動悸に襲われ、まるで崩れるように倒れ込む。

路「おい、賢一！…賢一！！」

いきなり倒れた賢一に、咄嗟に駆け寄る龍路。そして賢一を起こそうとして、顔を見る。

路「大丈夫か……―！」

賢一の顔つきを見て、龍路は思わず驚く。そして、肩を持ってくれている龍路の手を、賢一は力なく払いのける。

賢「くそ……くそぉ！」

悔しそうにそう叫び、賢一は片膝をついた状態で、再び頭を抱える。

賢「やめろ！！思い出すな！！」

そう叫んで、賢一は力ない足取りでふらふらと窓際まで歩き、窓に辿り着く前に、普段は使われていないドアを片手で思いっきり叩いた。

賢「智香子を殺したのは……お前じゃねえんだ……！」

その言葉に、龍路以外の部員たちも全員が気付いた。今目の前にいるのは……

修「ケンイチくん！」

その声に、龍路に手を貸してもらった時点ですでに賢一と入れ替わっていたケンイチは、いつになく怯えたような表情で部員たちのいる方を振り向く。そんなケンイチに、修丸は１番に駆けつける。

修「……その……僕たちにできることなんてあるかどうかもわかりませんけど、もしあるのなら、力になりますから……とにかく今は落ち着いてください……」

言葉を探すように、しかし心の底から心配してそう言う修丸に、ケンイチは何も言わずにふらふらとホワイトボードの方へと歩きはじめる。

修「あ……」

そして、張られた２枚の写真をボードから剥がし、それを持って賢一の席に座った。

ケ「お前の言う通りだな…全て知ってるオレが取り乱して、何になるっていうんだ……すまなかった……」

自嘲気味に苦笑して、修丸を見たケンイチ。

修「いえ……」

ケンイチを落ち着けるように、優しくそう答える修丸。そんな修丸を見て、落ち着いたような表情をするケンイチを見て、孝彦は静かに切り出す。

孝「なあ……お前今「全て知ってる」って言ったよな？」

ケ「……ああ。」

孝「全てってのは、賢一の記憶のことか？それとも陽がいなくなったことか？」

その問いに、ケンイチは持ってきた２枚の写真を机に置いて、それを見ながら答える。

ケ「……おそらく、宗光がいなくなったのは智香子が死んだことへの復讐だろう……」

隆「復讐…？ってか、さっきからちかとか智香子とか言ってるけどよ、それって誰なんだ？」

単純に疑問をぶつける隆平を少しの間み続けた後、ケンイチはまるで悔やむようにうつむく。

ケ「智香子は……神童智香子は、１０年前にオレが殺した賢一の実姉……賢一と血を分けた実の姉だよ……」

その言葉に、その場にいた全員が驚きを隠せなかった。

海「こ、殺したって……」

ケ「…ただ、直接殺したと言うわけではない。……智香子が死んでしまう要因を作ったのがオレなんだよ。」

そう言って、軽くだが頭を抱えるケンイチ。

ケ「宗光も智香子も…驚くほどに似すぎている。……そして、賢一はそんな女と、智香子の時と同様に姉弟として当たり前のように過ごしてきた。……それが、奴には気に喰わなかったんだろう……だから、賢一の姉を、宗光を……」

路「奴って、お前まさか陽がいなくなった…ってか、この写真をここに張った人をわかってるのか？！」

ケ「推測にすぎないが、な……」

晶「誰なんだよ……その奴ってのは……！」

焦るようにそう訊く晶に、ケンイチは億劫そうに顔を上げた。

ケ「神童智司……賢一と智香子の父親だよ。……おそらく、この世の誰よりも、賢一を疎んでいる人間だ。」

海「センパイの、お父さんが……？」

不思議がる龍海を一瞥した後、ケンイチはうつむき始める。

ケ「どこから話せばいいか……そうだな……」

少し悩むような口調でそう言って、ケンイチは静かに顔を上げる。

ケ「賢一や智香子の生まれた家…神童家はな、陽の目を浴びにくい分野だから世間的には知られていないが、医療研究の分野において一際注目されている一族だった。そこの長女として生まれたのが智香子で、智香子が１１歳になる年に遅れて生まれたのが、長男の賢一だ。だが、生まれたその瞬間から、賢一は父親から憎まれ続けてきたんだよ……」

修「生まれた時から憎まれ続けてって…なんでそんな……」

悲しそうな修丸に、ケンイチはまるで「仕方ない」と言ったような顔をしている。

ケ「頭のいい人間ほど、理性に飲み込まれやすい一面を持つ。…母親の命と引き換えに生まれてきた賢一を、智司は許すことができなかったのさ。」

隆「それって……もしかして賢一の母ちゃんは賢一が生まれた時に死んじまったってことか……？」

聞きにくそうにそう言う隆平に、ケンイチはうなずく。

ケ「ああ。賢一と智香子の母親、神童香莉は賢一を産むと同時に死んでしまった……だからオレも賢一も、母親の胎内でその声こそ聞いてはきたが、顔は写真でしか見たことがない。そんな香莉を、智司は誰よりも愛していた。」

そこまで言って、ケンイチは自嘲するように部員たちの方を見る。

ケ「いくら自分の血を引く子供とは言えども、最愛の妻を殺した存在を憎まずにはいられないだろ？」

海「でも、殺したって言ったって……そんなのセンパイは悪くは……」

ケ「それだけじゃない。最愛の妻を殺して生まれた赤ん坊が、化け物のような知能を持っていたんだからな。憎しみだけならまだしも、恐れまで入り混じれば誰だって尋常な考えを持つことは困難だろう？」

路「で、でもさ。知能っても、その……賢一はそんなに頭はよくは……」

そう訊いてくる龍路をじっと見て、ケンイチは切なげな顔をして誰もいない前方を向く。

ケ「誰もがあり得ないと言った。だがあり得てしまったんだ……賢一は、生まれた時にはすでに、大人と同じほどに脳が成長しきっていて、母体の中で大方の言語などを理解していた。そして生まれた後も脳は成長を続け、自らの足で歩き始めた頃には、賢一の頭脳は言葉の通りに人智を超えていた。なにより、賢一には一度見たこと、聞いたことを忘れず、そしてその膨大な記憶の中から欲しい記憶を自在に取り出せる超人的な、それこそ神の童のような記憶力が備わっていた。……そんな賢一を、智司はたいそう恐れただろう。だが、自尊心の塊のようなあの男は、妻を殺した赤ん坊に恐れを抱くことを屈辱だと感じ、その感情を憎しみとして賢一にぶつけ続けたのさ。」

そこまで話し、ケンイチは１６年前の出来事を思い出す。

―智「ねえお父さん……この子の名前は？」

眠っている赤ん坊を抱いて、ひどく不機嫌そうにソファに座っている父親の背を見ながら立っている、小学生くらいの女の子がいる。

智司（司）「名前……？そんなもの、必要ない。」

智「ちょっと、何言ってるの？！……それって、この子を産んでお母さんが死んじゃったから？そんなのこの子は悪く―」

司「悪くない？！…ふざけるな！！その化け物が生まれなければ香莉は死ななかった！！お前だって香莉を殺されて悲しんだだろう？！なのに……」

勢いで立ち上がり、そこまで怒鳴っておいて、智司は急に罪悪感にさいなまれたような顔をする。

司「ああ、すまない智香子……お前は悪くないんだ、そんな顔をするな……悪いのはすべてその化け物―」

智「そんな言い方しないで……」

司「なんだって……？」

智「私の弟を、化け物なんて言わないで！！」

本気で怒る智香子に、智司はどうしようもなく困ってしまった後、すぐに不機嫌そうに智香子に背を向けて再びソファに座る。

司「オレは……名前なんて付けないからな。」

智「お父さんがつけないなら、私がつけるから。」

力づよくそう言い放ち、智香子は父のいるリビングを後にした。―

父と言いあった日の翌朝、朝早くに起きて机に向かって何かを考えている智香子は、椅子に座ったままふっと後ろを振り向いた。

　智「あ、おはよう！」

「おはよう…」

たどたどしくそう返すのは、智香子のベッドから智香子を見ていた赤ん坊だった。

智「あのね、君の名前を考えたんだけど、聞いてくれる？！」

「名前？」

嬉しそうにそう言う智香子に、赤ん坊もどこか嬉しそうな顔をする。

智「そう！これ、ヨシカズって読むんだよ！」

そう言って、智香子は机の上に置いておいた紙を見せる。

「ヨシカズ……」

智「そう！あのね、この字は私の智って字と同じで、頭のいい人を表す漢字でね、こっちはね、あなたは世界で１人だけだよ！って意味。…どうかな？」

「いいの？名前……」

たどたどしくも嬉しそうな赤ん坊に、智香子も嬉しそうに言う。

智「もちろん！……もらってくれるのね！ありがとう！賢一くん！」

賢「ありがとう……」

おそらく、もっとしっかりとした会話をしたかったのだろう。だが、体の成長が脳に追いつかないせいで、この時この赤ん坊は、言葉も短いながらに、自身の感情を必死に伝えようとしていた。―

ケ「智司は、たどたどしくも生まれながらに会話を成せる賢一を化け物と罵倒するだけで名前を与えることもなく、愛情も欠片すら与えずに過ごしてきた。そして皮肉のように、妻の、香莉の面影のある智香子を溺愛していた。…だが、賢一を弟と認め、大事に思っていた智香子との衝突も増え、智司はますます賢一を憎むようになっていったんだ。」

―賢一が２歳になった後のことである。

司「智香子、オレはお前のことを心配しているんだ。あんな化け物にかまっていたら、お前もいつか香莉のように不幸になるかもしれないんだぞ？」

　智「不幸って何？……ヨシくんのことを悪く言われることの方が、私にとってよっぽど不幸よ！」

司「智香子！！」

怒鳴られ、智香子は泣きそうな顔をする。そんな智香子を見て、智司は急に罪悪感にさいなまれる。

司「わかってくれ、オレはお前が大事だから……」

智「私のことが大事なら、ヨシくんのことも大事にしてよ！」

そう言って、智香子は自室のある２階へと駆け上がっていく。そして、階段を上り終えたところで、悲しそうな顔をしている賢一と鉢合わせた。

賢「ごめんね……僕のせいで、ちかがお父さんに怒られちゃうね……」

そんな賢一を、智香子は優しく抱きしめる。

智「ヨシくんのせいじゃないよ……私は平気だよ……」

そして、賢一の顔をじっと見る。

智「そうだ、今日お父さんが寝た後にさ、ちょっとお出かけしよっか！」

賢「お出かけ？」

智「そ、お出かけ！」

その日の夜、智香子と賢一は人気のない公園のベンチに並んで座っていた。……高校生になった賢一が、度々夢の中で見た公園だった。

智「誰もいない公園って、なんか気持ちいいね！」

賢「うん……」

智「ほぉーら、せっかく出掛けたんだからもっと楽しもう？…あ、それとも本当は面倒くさかった…？」

心配そうにそう言う智香子に、賢一は慌てる。

賢「違うよ！ちかと出掛けられてすごく嬉しい！……嬉しいけど……」

そう言って、賢一はうつむいてしまう。

賢「僕がいなかったらお母さんは死ななかったし、ちかだってお父さんに怒られることもないだろうし……やっぱ、僕はいらない存在なんだよ……―！」

そう嘆きながら、賢一は小さく驚く。智香子が、優しく力強く賢一を抱いていたのだった。

智「いらない存在だなんて言わないで……私は、ヨシくんが必要なんだから……」

賢「……ごめん……ありがとう……」

そう言う賢一は、静かにも泣いていた。―

ケ「智香子ほど賢一を理解し、愛してくれた人間はいなかったよ。そして賢一も、智司にろくに外出を許してもらえなかったこともあってか、智香子以上に自分を愛してくれる人間には出会えなかった。」

静かにそう言って、ケンイチは部員たちを見回す。

ケ「気付いているか？…賢一は、姉としてではなく、男女として宗光を想っている。そして、宗光も弟に対する感情とは別に、賢一を想っている……」

その言葉に、みなどこか納得するような顔をしている。

路「そりゃ……なんとなくそんな気はしてたけど……でもそれがどうだってんだ？」

不思議そうな龍路に、ケンイチは再びうつむく。

ケ「記憶を失くそうと、賢一は繰り返しちまったんだ。……いや、繰り返したわけではないな。姉と言うだけで、智香子と宗光は違う人間だ。……だが、智司はそうも思えなかったから、宗光を……」

後悔するように人知れず歯を食いしばり、またケンイチは昔のことを回想し始める。

―賢一が４歳になる年の冬のある日…本当の彼の誕生日に、智香子と賢一はいつものように父が寝るのを待って公園へと出掛けていた。

智「はい！誕生日おめでとう……ヨシくんももう４歳かぁ。早いね！」

そう言って、智香子は賢一に手紙を渡す。毎年変わらない、賢一にとってはどんな物よりも嬉しい、彼女からの誕生日プレゼントだった。

賢「ありがとう……でも、なんか誕生日が来ても変な感じなんだ。……大きくなってるのは体だけで、知能とかが普通の子供みたいに成長してないからかな？」

智「もう、そうやってお父さんみたいなこと言って！……確かに知能は生まれた時からすごかったけど、ヨシくんは心だってちゃんと成長してるよ。」

賢「そう、かな……」

智「どんなに頭がよくってもね、心の成長がないと理解できないことも多いんだよ？たとえばさ、恋愛って言葉の意味は説明できても、どういう気持ちが恋をする気持ちか、なんて心が育たないとわからないでしょ？……」

その言葉に、賢一はどこかハッとする。そんなことには気付かないまま、智香子は少し照れくさそうに言う。

智「私なんか、ヨシくんのおかげでそーいう気持ちをいっぱい知ったんだから……誰かを守りたいって気持ち、誰かを愛おしいって思う気持ち、誰かに必要とされてるんだなって気持ち、それと……」

そこまで言って、智香子は賢一の顔をじっと見つめる。

智「ねえ、知ってる？恋ってさ、別に血が繋がってても悪い事じゃないって……」

賢「え、ホント？！」

珍しく、感情をあらわにする賢一に少し驚き、そしてすぐにその真意を察して微笑む智香子。

智「ホントだよ……よかった。こんな話して、嫌そうな顔されたらどうしようかと思った。」

賢「え……？」

驚く賢一に、智香子は優しく言う。

智「確かにね、セケンってものを考えたら私の考えはきっとおかしいよ。普通は姉弟では恋なんかしない。みんなは姉弟間の恋心なんか認めてはくれない。結婚も、子供を残すこともできない。でもね……私はヨシくんのことが……男の子として好きなんだ。」

空に浮かぶ、雲の隙間から顔を出す上弦の月を見上げながらそう言い、智香子は賢一を見つめる。

智「辛抱強くて、優しくて、純粋で、こんな私を必要としてくれて……あなた以上の男の子は、私見つけられないよ。…たとえ誰にも認められなくたって、私はあなたと一緒に生きていきたいの。……姉弟としてもそうだし、……男女として……」

そんな智香子に、賢一も嬉しそうに智香子を見つめている。

賢「……お母さんを死なせちゃって、それでお父さんにとって邪魔な存在で…研究者の人たちにもお父さんみたいに化け物を見るような目で見られるような僕に、こんなに優しくしてくれるのはちかだけだよ……いつも思うんだ。もし、ちかと血が繋がってなかったら…歳がこんなに離れてなかったらって……」

そこまで言って、賢一は嬉しさの為か泣き出してしまう。

賢「血の繋がった弟で、こんな子供で、しかも人と違う化け物みたいな僕にこんなこと言われてもちかが困ると思って……それでずっと言えなかった……けど、僕もちかと結ばれたいって思ってたんだよ……？」

それ以上言えなくなる賢一を、智香子はいつもよりも飛び切り優しく抱きしめる。

智「ヨシくんは化け物なんかじゃないよ……」

そう言って、智香子は賢一を抱きしめた腕に、一層気持ちを込める。

智「すごいよ、私たち両思いだったんだよ……こんな嬉しい気持ちになれたの、生まれて初めてかもしれない……」

その言葉に、賢一は何も言わずとも至福の時間を感じる。そして智香子に抱かれながら、ふと賢一は空を見上げて嬉しそうに言う。

賢「あ、見てちか！雪だよ！」

賢一にそう言われ、智香子もふと空を見上げる。そこには、深々と静かに雪が降り始めていた。

智「ホントだ！…４年前と一緒！」

嬉しそうにそう言って、智香子は優しく賢一を見る。

智「ヨシくんは、雪、好きなの？」

そう言う智香子に、賢一は小さくうなずく。

賢「うん。自然に生まれる雪には、同じ形の結晶って絶対にないんだって。……ちかがくれた賢一って名前も、僕は世界に１人だけなんだって、そういう意味を込めてくれてるから……だから僕、雪が好きなんだ。」

そんな賢一の話に、智香子も嬉しそうに空を見上げる。

智「私も好きだなぁ。だって、ヨシくんが生まれた時に降っていたのが雪だったから。ヨシくんを私のもとに送り届けてくれたんだなって思うと、すごく感謝したくなるの！」

そう言って、智香子は賢一を見て微笑む。そして賢一も、そんな智香子を見て嬉しそうに微笑んだ。１つの異端な愛が生まれたこの夜、２人はいつもより長くこの公園で夜を感じていた。―

修「お姉さんと、賢一くんが付き合っていた……？」

ケ「ああ。誰にも言うことはできなかったけどな。…だが智司は、このことに薄々感づいては不信感をつのらせていたようだし、智香子と賢一が愛し合っていたことで不憫な思いをした男だっていた。」

海「不憫な思い……？」

ケ「智香子が高校生になって、ソイツは現れたんだ。」

―賢「あ、ちかおかえり！……？」

高校から帰ってきた智香子を玄関で迎えた賢一は、一緒にいる男子に不思議そうな顔をする。

智「ただいま！…あ、この人はね、私のクラスメイトの―」

楝「初めまして。君が弟くんかい？」

賢「あ、えっと……賢一です。神童賢一……」

緊張気味の賢一に、男子は優しく笑う。

楝「よろしく、賢一くん。俺は楝蛇。楝蛇知人っていうんだ。智香子のクラスメートでね、今日は一緒に宿題をしようと思って。」

賢一に挨拶をし、楝蛇と名乗った男子は智香子の顔を見る。

楝「聞いてた通り、弟くんは賢そうな顔をしてるな。」

智「「賢そう」じゃなくって、本当に頭がいいんだから！……あ、そうだ、ヨシくんも一緒に部屋来る？…まだお父さんも帰ってこないしさ。」

賢「え、えっと……」

遠慮深く楝蛇を見る賢一に、楝蛇は優しく笑って賢一と目線を合わせるようにしゃがむ。

楝「俺はいいよ。…君が頭いいってのも気になるし。」

いたずらっぽくそう言う楝蛇に、賢一もホッとしたように微笑む。

楝「決まりだ！３人で宿題をやろう。」

そんな３人は、どこか微笑ましい光景であった。―

ケ「はじめのうちは、楝蛇も賢一をかわいがっていたし、頭がいいと言っても人のよさは昔っから相変わらずだからな、賢一もそんな楝蛇に懐いていた。でも、次第にわかってきたんだ。楝蛇も智司と同種の人間だってな。」

―智「ごめん、家を空けるのはちょっと……うん、ヨシくん心配だし……え？……違うわよ、そうじゃなくてお父さんがね……２人っきりにしたらヨシくんかわいそうだもん……ちょっとバカ言わないで！比べるとか、そうじゃなくて……ヨシくんは大事な弟だから……あ、ちょっと知人！」

そう言って、智香子は困ったように受話器を置く。智司が仕事で家を空けている間に、家の電話で楝蛇と電話をしていた智香子を、少し離れたところから賢一は心配そうに見ていた。

智「あ、ごめんね、うるさかった？」

苦笑してそう言う智香子のもとに、賢一は心配そうに歩み寄る。

賢「ねえ、やっぱりちかは普通の男の子と一緒の方がいいよ……楝蛇さんは、きっと僕なんかよりもちかのこと……」

悲しそうにそう言う賢一を、智香子は優しく抱きしめる。

智「イヤよ……知人は確かに私に優しくしてくれるけど……ヨシくんみたいな優しさじゃない……私はヨシくんがいい。ヨシくんじゃなきゃイヤなの……」

賢「僕だってちかと一緒じゃなきゃイヤけど……でも、楝蛇さんもかわいそうだし、お父さんだって僕たちのこと知ったら……」

智「周りのことなんて気にしないで……もっと自分の気持ちを大事にして……」

その次の日、楝蛇は智香子を家まで送ってくれた。そして２人を賢一が玄関まで出迎えに来た時に家の電話が鳴ったので、智香子は楝蛇と賢一を玄関に待たせて電話を取りに家の中に入る。

楝「なあ、賢一くん……俺、君が正直羨ましいよ。」

賢「え？」

いきなりの言葉に、賢一は驚いて楝蛇を見上げる。

楝「君の話をしている時の智香子は、いつだって嬉しそうだ。休みの日にどこか出掛けようって誘っても、君が心配だからっていつも断る。」

そこまでは、智香子のいるリビングを見ながら言う楝蛇。そして、嫌悪感を隠すことなく賢一を見下すように見る。

楝「君がいなかったらさ、俺、もっと智香子と仲良くなれたと思うんだけどな……」

賢「え……」

困ってしまう賢一に、楝蛇は続ける。

楝「昨日だって、土曜日に出掛けようって智香子を誘ったのに、君とお父さんを２人にするのがかわいそうだからって断られたよ。…考えてみろよ？これって君がいなかったら、俺はもっと智香子と一緒の時間を持てたって事だろう？」

賢「……」

恨むようにそう言う楝蛇に、賢一は何も言えずにうつむく。と、そこへ智香子が戻ってくる気配がすると、楝蛇はわざとらしく優しい笑顔になる。

智「ごめんね！お父さんの仕事の電話だったみたいで。……あれ、ヨシくんどうしたの？」

うつむく賢一に気付いて、智香子は心配そうにそう訊くが、賢一は答えようとしない。

楝「いや、俺が悪かったみたいだよ。…君たちのお父さんのことを聞いたら、不安にさせちゃったみたいでね。」

賢一と話していた時のことが嘘のようにそう言う楝蛇を疑うことなく、智香子はしゃがんで賢一に言う。

智「そう…まあ、知人に悪気があった訳じゃないって、それくらいわかってるよね？」

賢「うん……」

小さくそう言う賢一の頭を、智香子は優しく撫でてやる。

智「ふふ、優しいヨシくん、私大好きだよ。」

そう言って、智香子は立ち上がる。

智「知人もあんまり気にしないでね。…お父さんのことを話して不安になる家庭も珍しい訳だしさ……」

楝「大丈夫だよ。…でも、これからはできるだけ気を付ける。」

智「ごめんね、気を遣わせちゃって。…今日も送ってくれてありがとう！」

楝「こっちこそ、智香子と帰れて楽しいからお互い様さ。じゃあ、また明日な。」

そう言って玄関を出ようとする間際、楝蛇は賢一を見下すように見て、憎々しい表情を一瞬見せた。

賢「…！」

智「…？どうしたの？」

賢「ううん、なんでもない……」

賢一は、智香子のいない間に楝蛇にされた話を話すことができなかった。智香子も、２人が何を話していたかを、気にもしなかった。

楝蛇が賢一に本心を垣間見せた日の夜、いつもの公園、いつものベンチに、賢一と智香子は並んで座っていた。

智「ねえ、やっぱり何かあったんじゃない？……知人帰ってから、ヨシくん元気ないよ？」

その言葉に、賢一はうつむいて話し出す。

賢「あのね……やっぱり楝蛇さん、ちかのことが好きなんだよ……僕がいなかったら、もっとちかと仲良くできたんじゃないかって。もっとちかと一緒にいれるんじゃないかって、そう言ってた……」

その言葉に、智香子は呆れるような顔をする。

智「知人ったら、そんなこと言ってたんだ……」

そして、今度は少しだけだが怒るような声になる。

智「しかも、私に嘘まで付いて……」

賢「やっぱダメなんだよ……姉弟で、人目を避けてこんなこと……」

泣きそうな声でそう言う賢一に、智香子もどっと切なさがこみ上げる。そして、ふっと空を見上げて言う。

智「悲しいよね…認められない恋なんて……」

賢「え？」

不思議がる賢一を、智香子は悲しそうな笑顔で見る。

智「私はこんなにもヨシくんのことが好きなのに、姉弟ってだけで誰にも認められないなんてさ……覚悟はしてたつもりだけど、いざその現実を突き付けられちゃうと、ね……」

そして、智香子は静かにも涙を流し、そのことに自分でも気づかないままに賢一を見る。

智「ごめんね、私のわがままでヨシくんにまで辛い思いさせちゃって……」

賢「辛くなんか……僕だってちかのことが好きだもん。……こんなこと本人には言えないけど、楝蛇さんの気持ちよりもずっと、ちかのこと大好きだもん。」

その言葉に、智香子は嬉しさからか涙は止まったようだった。

智「そうだよね……お互いが好きなんだもん、仕方ないよね。」

そして、静かにギュッと賢一の手を握る。

智「私たち、確かに血の繋がった姉弟だけど、でも……私たちがお互いを想うこの気持ちは、偽物じゃないよね……」

賢「うん。本物だよ、絶対……」

優しくも力強くそう言って、賢一は智香子が握ってくれた手を握り返した。―

ケ「今思えば、楝蛇は本当に不憫な男だった。智香子に届きさえすれば認められるその想いを、智香子と想い合ってはいたものの、恋人としては認められない男の存在のせいで伝える事すらできなかったんだからな……ただ、楝蛇の気持ちを申し訳なく思い、せめて友達として傍にいようとしてくれていた智香子の気持ちに楝蛇は気付いていたのか、それはオレもわからないが……」

と、そこまで話すケンイチの話に聞き入る部員たちだったが、楝蛇の話の途中から、なぜか晶が話を聞きながらもどこか考え込んでいる様子だった。そんな晶に気付き、ケンイチは自嘲するように小さく笑う。

ケ「どうした、響鬼？…まさか似たような境遇の人間に会ったことでもあるのか？」

晶「いや……」

そう言って、晶は携帯を開いている。

晶「なあケンイチ……その楝蛇って人の名前、なんつったっけ？」

ケ「知人だ……楝蛇知人だと奴は名乗っていたが、それがどうした？」

珍しく少し不思議そうな表情でそう言うケンイチに、晶もどこか考えるように言う。

晶「いや、なんか聞いたことあるような名前だなって思ってさ……まあ、たぶん同じ名前ってだけだろうけど……ほら。」

そう言って、晶はある人物の電話帳を開いてケンイチに見せた。

ケ「……！」

その名前を見た時、ケンイチは驚きを隠せなかった。

「ﾊﾄｶﾞﾔﾄﾓﾋﾄ ｾﾝｾｲ

鳩谷知人　先生

メディア部顧問

０９０－○○□◇－△◎◇○

language-of-lifework@ezwed.me.jq」

晶「鳩谷先生もさ、知人って名前なんだよな。……名前で呼ぶ機会、あんまないから印象薄いけど。」

隆「あれ、先生ってそんな名前だったっけ？」

晶「ああ。部活でも授業でもフルネームで自己紹介しないからさ、なんでかって訊いたらなんかあんまり名前で呼ばれるの好きじゃないって、前に言ってたよ。それこそ、お前らが入学した年の早い頃だった気がする。」

そう話す晶の言葉も聞こえていないかのように、ケンイチは腹立たしげにつぶやく。

ケ「まさか……」

海「え？」

ケンイチのつぶやきに、席の近い龍海が不思議がる。そんなことにも気づかず、ケンイチはまだ賢一と入れ替わっていなかった頃、陽が高校に入学したころのことを思い出す。

―陽「それでね、メディア部の顧問も担任の鳩谷先生だったの！」

　父「ほ～、担任と顧問が一緒だと、何かと安心感があるんじゃないか？」

　陽「うん！しかも若い先生だから、すごく話しやすいの。」

　賢「へえ、若いんだ。…いくつくらい？」

　陽「今年で２６だって言ってたよ。ちょうど私たちと１０歳違うんだって。」―

ケ「宗光が入学した年で２６なら、今年で２７……智香子は１０年前、１７歳で死んだ……」

思い出すかのようにぶつぶつとそう言うケンイチ。そして、人知れずまた昔のことを思い出す。

―いつものように、智香子の部屋で宿題をしている智香子と楝蛇。そして、そんな２人と一緒にいる賢一。

智「え、離婚……？」

楝「いや、まだ決まった訳じゃないんだけどさ。父さんの事業がマズくって、それに俺や母さんを付き合わせたくないって。」

智「そっか……じゃあ、両親の不仲とかじゃないのね？」

少し安心したようにそう言う智香子。

楝「まあね。でもさ、この調子じゃ俺は母さんに引き取られるっぽいんだけど、この歳になって苗字変わるのもなんかなぁ……」

智「そうよね……でもさ、今の時代ならお父さんの苗字名乗ってもいいとか、そういうことはできないのかな？」

楝「どうだろう…まあ、ああ言えばこう言うだけど、それはそれで母さんに悪い気もするし。……それに、どうしても嫌だって訳じゃないからさ。」

智「そっかぁ……じゃあさ、苗字変わったらちゃんと教えてよね？」

楝「そりゃあもちろん。」―

そこまで思い出し、ケンイチは晶の携帯を取る。

晶「あ、おい！」

晶が止めるのも聞かず、ケンイチは発進ボタンを押していた。

孝「お前な、名前が一緒ってだけでなんで鳩谷先生に電話なんか……」

ケ「名前だけじゃない……歳も、楝蛇の姓だって今は……―！」

その時、電話が繋がったのかケンイチは驚きで目を丸くしていた。

ケンイチが電話を掛ける少し前、ある場所で鳩谷は陽と２人でいた。しかし、それは決して担任や顧問と生徒としてではなかった。

陽「ヨシくんと智香子さんが、愛し合ってた……？」

鳩「…智香子も賢一も、問いただしたところでそうだとは言わなかったけどな。だけど、智香子が賢一を見る目は、誰が見たって男を想っている目だった。同じく、賢一が智香子を見る目だって、あれは姉を慕うような、そんな目なんかじゃなかった……」

陽「でも…それは考えすぎなんじゃ……」

鳩「考えすぎ？……お前にはわからないよ。智香子にどんなに想いを伝えようと、賢一に邪魔されて気付いてももらえなかった俺の気持ちなんてな。」

その時、鳩谷の携帯が鳴る。

鳩「ん？……響鬼から……？」

携帯の表示を見てそうつぶやき、鳩谷はふと陽を見る。

鳩「そう言えば、賢一は携帯を持っていないんだったな。」

陽「ええ……」

陽の答えを聞き、鳩谷は不敵な笑みを浮かべて電話に出る。鳩谷が通話ボタンを押した時、電話の向こうからはケンイチの声が聞こえてきた。

ケ「歳も、楝蛇の姓だって今は……」

鳩「その言いぐさ……１０年も前に話した俺の両親の離婚の話を覚えているとは、さすが、化け物と呼ばれていただけあるな。……でもまあ、まさかそっちから連絡をくれるとは思ってなかったから少し驚いたよ。」

ケ「……！お前、やはりあの楝蛇知人なのか……」

鳩「ああ。…しかし、もっと早く気付かれるかと思ってたが、意外と気付かれないもんだな。名前を変えるのは、苗字と違って簡単じゃないからずっと知人のままだったのに。」

ケ「お前、その事も計算して、名前で呼ばれることを嫌がってたってのか？」

鳩「…まあ、お前が生きていると知ったのは偶然宗光のクラスを持った時だし、第一、俺が高校教師になったのも智香子の死とは全く関係ない。…お前が生きていると気づくまでは、別に名前で呼ばれたくない、なんてことは言ってはいなかったんだがな。」

電話でそう話す鳩谷を、陽は不安そうに見ている。

鳩「あ、ちょっと待ってくれないか？…「チカコノカワリ」が、お前の話が気になってるみたいなんだ。」

陽「！」

ケ「テメェ！」

「チカコノカワリ」…わざとらしく言い放たれたその言葉にケンイチは怒りを覚える。が、そんなこともお構いなしに鳩谷は一度携帯を耳元から離し、スピーカーフォンにして陽と自分の真ん中に位置する、格子のはめられている小窓の桟に携帯を置く。

鳩「これでお前の声が宗光に聞こえるよ。」

そう言って、鳩谷は陽の方を見る。

鳩「お前も、何か言いたいことがあれば言っていいんだぞ？」

陽「何か、って言われても……」

困惑する陽だったが、その声はケンイチに届く。

ケ「……。」

ケンイチは何も言いこそしなかったが、その声から陽がまだ無事であることにひとまず安堵する。

隆「おい、先生と陽が一緒にいるのか？！」

そんな隆平を見て、ケンイチは気付いたように携帯を机に置いて、スピーカーフォンにする。

ケ「お前たちは今どこにいる……！」

鳩谷に対して威圧をかけるケンイチだったが、鳩谷はそれを受けて陽を見る。

鳩「だ、そうだ。答えてやったらどうだ？」

陽「え……」

戸惑う陽の声を聞き、ケンイチは気付くように言う。

ケ「……わからないのか？」

陽「ごめんなさい……」

不安に満ちている陽の声に、ケンイチのみならず部員たちも不安を隠せない。

晶「あの、先生！陽は無事なんですよね？！」

鳩「ああ、無事だよ。……今のところはね。」

路「今のところって……それどういう意味ですか？！」

鳩「ん～、お前たちにはわからないか。……でも、神童ならわかると思うんだが。」

ケ「なんだと…？」

鳩「今日が何月何日か……忘れるわけないよな？」

ケ「……！テメエまさか！」

鳩「お前は俺の大事なモノを奪った。奪っておいて、自分は「カワリ」を見つけて、都合の悪い事だけを全てを忘れて…いや、忘れたフリをして何もなかったかのように生きてきた。……お前のその夢、俺がきっかり１０年で終わらせてやるよ。それが俺の…いや、智香子のお前への復讐だ。」

ケ「…！」

鳩谷の言葉に、ケンイチの脳裏にはフラッシュバックのように、自分に背を向けて自分の前に飛び出してくる、智香子の姿がよぎっていく。

ケ「くそっ……！」

咄嗟に片手で頭を押さえるケンイチ。

修「大丈夫ですか…？」

心配する修丸だったが、ケンイチは修丸の方は見ず、机に置かれた晶の携帯を睨みつける。

ケ「テメエ……宗光を殺すつもりか……？！」

その言葉に、部員たちや電話の向こうの陽は驚きを隠せなかった。

鳩「まあ、そう言ったところだが…そうだな、智香子が死んだ時間までは待ってやってもいい。」

ケ「何……？」

鳩「さて、待つからにはヒントもやらないとさすがにひどいよな。……智香子の写真の裏に、宗光の居場所のヒントが書いてある。そのヒントが、お前……ケンイチにとって何を意味するか、それをじっくり考えることだな。」

ケ「オレにとって、だと……？」

いぶかしげにそう言うケンイチに、鳩谷は思い出したかのように言う。

鳩「それと、これは俺たちにとっての問題だ。ベタな事を言うようで悪いが、警察には言いふらさない方が宗光の為だと思うぞ？とはいえ、警察に知らせたところで、死ぬのが少し早まるだけだがな。……まあ、念のためにでも刑事の息子の幾永には忠告しといた方がいいかもな……とにかく、お前がここに来るまでにタイムリミットが来ないことを願ってるよ。」

そして、電話の向こうからブチっと切れる音がした。

海「あ、切れちゃった……」

みなが不安そうに晶の携帯を見ている中、ケンイチは何かをためらうように智香子の写真を手に取った。

電話を一方的に切り、鳩谷は不安の色を増す陽を見る。

鳩「さて、智香子が死んだ時間まではまだだいぶあるからな。……少し、雪を見てくる。……今日の雪は、智香子が死んだ日に振っていた雪とまるで同じなんだ……」

そう言って、鳩谷は陽と一緒にいたその部屋を出る。そのドアが閉まると同時に、ドアの向こうから鍵の閉まるような音がした。

陽「（なんで……こんなことになっちゃったんだろう……）」

泣きそうな顔でそう思った陽は、昨日の出来事を思い出し始める。

―陽が部活に出なかった昨日の放課後、陽は１人、学校の裏門で携帯を見ながら誰かを待っていた。閏台高校の裏門は現在は使用する生徒があまりいなく、誰かを待っている間、陽は誰とも会わなかった。

「Time：2/24　21：11

From：鳩谷先生

　Subject：明日なんだが

　Text：クラスの連絡以外でメールするなんて初めてだな。

それで明日の放課後なんだが、ちょっと神童のことで話があるんだ。その関係でお前に会ってほしい人がいてな、ただその人と待ち合わせている場所が学校から離れていて、そこには車で行きたいんだ。だからＨＲが終わったら裏門のところで待っててほしいんだが……教師が生徒を自分の車に乗せるのは他の先生にあまりいい顔されないから、できるだけ誰にもこのことは言わないでほしい。もちろん神童にもだ。」

今までずっと賢一の過去を知っていることを隠し続け、善良な顔で陽に接してきた鳩谷のメールに、陽は疑うこともなく、放課後になると真っ先に裏門へと向かっていた。何より賢一のこととなると、気にせずにはいられなかったのである。

陽「（ヨシくんのことって何だろう……それに会ってほしい人って……）」陽がそんなことを考えているとふと誰かが近づいてくる足音が聞こえ、そっちの方を見てみると、そこには鳩谷が陽の方に向かって歩いて来ていた。

鳩「悪い！待たせちゃったか？」

申し訳なさそうにそう言う鳩谷に、陽は快く言う。

陽「いえ、そんなに待ってないですよ。」

そう言って、陽は少し心配そうな顔をする。

陽「あの…それで、ヨシくんのことって何なんですか？」

鳩「ああ、そうだ。」

思い出したようにそう言い、鳩谷は真剣な顔をする。

鳩「……実はな、本当に偶然だろうけど、神童のことを知ってるっていう人を見つけたんだよ。」

陽「え……本当ですか？！」

鳩「ああ。メールで伝えた「会ってほしい人」ってのはその人なんだが、その人に神童やお前の話をしたら、今日会って話がしたいって言ってたんだ。……ただ、最近は神童も記憶のことで不安定なことが多いだろう？だから、まずはお前だけで話を聞いた方がいいと思ってな。」

陽「そうですね……今はまだ、ヨシくんにそういう話はしない方がいい気がします……ただでさえ、記憶が無理矢理戻ろうとしているみたいだから……」

鳩谷の話に、陽も賢一を心配してか納得している。

鳩「だろう？…それで、まあ車でならそんなに遠くない場所で待ち合わせてるんだが、今から行っても大丈夫か？」

陽「えっと、大丈夫ですけど…ただ部活になんの連絡もしてないから……」

鳩「ああ、それなら俺が佐武に連絡しといたよ。……間違えて響鬼に連絡入れそうになったけどな。」

そう言って苦笑する鳩谷に、陽も小さく笑っている。

陽「もう、新部長って先生も一緒に選んだんでしょ？」

鳩「まあ、そうなんだがな。……じゃあ、部活の連絡以外大丈夫なら、そろそろ行こうか。ここまで車持ってくるから、ちょっと待っててくれ。」

そう言って鳩谷はいったん学校の敷地内へ戻って行く。

陽「（でも、ヨシくんのことを知ってる人ってどんな人なんだろう……）」

そんな疑問と共に、陽は鳩谷を待っていた。

陽「ねえ先生？ヨシくんを知ってる人って、どんな人なんですか？もしかして本当の家族とか？」

鳩谷の運転する車の助手席で、陽はふとそんなことを訊く。

鳩「……ああ。神童智香子さんって言ってな、神童……えっと、苗字で呼んでたらややこしくなるな。その、賢一の血を分けた姉だそうだ。」

陽「え……智香子、さん……？！」

鳩谷の話にどこか驚きを隠せない陽に、鳩谷は運転をしながら反応する。

鳩「どうした、もしかしてお前、智香子さんを知ってるのか？」

陽「いえ……その、ヨシくんが前に寝言で言ってたんです。すごく悲しそうな顔で、「ちか」って……それに、この前１度だけ「智香子」って言ってましたし……やっぱりあの寝言、うちに来る前のことと関係があったんだ……」

その話に鳩谷は無意識に眉をひそめたが、陽はそんなことには気付かなかった。

鳩「そうか、神童がそんなことを……」

そんな話の中、鳩谷の運転する車は路地裏に入って行き、なぜか行き止まりでも信号でもないところで停止した。

陽「あの……どうしたんですか？もしかしてここで待ち合わせとか？」

不思議がる陽に、鳩谷は運転席の下に手を入れて何かをし始めながら言う。

鳩「ああ、いや。待ち合わせはここではないんだが、ちょっとお前に手伝ってほしいことがあってな。」

陽「手伝ってほしいこと？」

鳩「ああ……」

下を向いているがために陽には見えていなかったが、そう言った鳩谷の顔には不気味な笑みがあった。だが、作業を終えて顔を上げた鳩谷の表情には、先ほどの不気味な笑みはすでに消えていた。

鳩「なあ、ちょっと窓の外を見てもらっていいか？」

陽「窓の外ですか？」

そう言いながら、陽は言われた通りに窓の外を見た。

鳩「ああ……」

そう言う鳩谷の右手には、座席の下から取り出したある物があった。

陽「あの、外に何かあるんですか……―！」

そう訊こうとした陽の口を、何かが塞いだ。

陽「んー！んーー！」

何が起きたかも理解できないままに必死に抵抗する陽だったが、程なくして意識を失ってしまった。

鳩「……もう少しだ、もう少しだよ智香子……」

気を失った陽の体勢ををシートにもたれるように直し、再び不気味な笑みを浮かべてそうつぶやいた鳩谷の足元には薬品の瓶が、彼の右手には薬品のしみ込んだハンカチが握られていた。そして、そのハンカチをダッシュボードにしまい、鳩谷は眼鏡を静かに外した。

鳩「君の無念は、俺が絶対に晴らしてやるから……」

先ほどの表情とは一転して、どこか悲しそうにそうつぶやく男の顔は、ケンイチの知る楝蛇知人の面影を、濃く残しているようだった。

陽「ん……」

格子のはまった窓から差し込むわずかな光に、陽は目を覚ました。日光と言うよりは、雪雲の放つわずかな光のようである。

陽「（あれ……ここ、どこ……？）」

自分の置かれている状況もわからず、立ち上がろうとして違和感に気付く。

陽「（え、なにこれ……？！）」

座った状態から立ち上がることもできずに、驚いて自分の背中側を見ようとした陽。だが確認できたのは、自分がもたれている柱のようなものの後ろに、自分の両手がまわされていること。柱の後ろにまわされた両手が、縄か何かによって固定されていることぐらいだった。

陽「（どうなってるの……）―！」

と、その時、陽がいる室内の出入り口の戸がきしむ音がして、陽は驚いて出入り口の方を見た。

鳩「お、目が覚めたか？」

陽「鳩谷先生……？」

中に入ってきたのは、眼鏡をかけていないせいでいつもと雰囲気の違う鳩谷だった。

鳩「それにしてもよく寝たものだな。…まだ明け方とは言え、もう２６日だぞ？」

陽「２６日…？２５日じゃなくて……？」

そう言われ、陽は目覚める前の事を思い出そうとするが、その様子を見て鳩谷が気付いたように言う。

鳩「なんだ、昨日のことも覚えてないのか？……まあ、無理もないか。……俺は昨日、お前に手伝ってほしいことがあったんで、とりあえず車の中で眠ってもらって、怪しまれないようにトランクに入れて、いったん部活に顔を出し、夜のうちに車を走らせてお前をここまで運んだんだ。……どうだ？思い出せそうか？」

そこまで話す鳩谷を見て、陽は思い出したような顔をする。それを見た鳩谷はいたずらっぽく笑う。

鳩「ま、実際自分でもここまでうまくいくとは思ってなかったけどな。」

そんな鳩谷に、陽はどこか警戒するような口調で言う。

陽「あの……ここはどこなんですか？」

その質問に、鳩谷はなぜかひどく悲しそうな顔をした。

鳩「悪いけど、それはまだ教えられないな。……でも、代わりと言っちゃなんだが、お前に会わせたい人にはちゃんと会わせてやるよ。」

そう言った鳩谷は陽に歩み寄り、ポケットから財布を取り出し、その中から１枚の写真を出して陽に見せる。

陽「…！」

鳩「神童智香子……賢一の１１歳年上の姉であり、１０年前に賢一に殺された、俺がこの世で一番大事に想っている人だ。」

陽「嘘……」

写真を見て、陽は驚きを隠せなかった。写真の中には、鏡で見る自分とまったくと言っていいほど同じ顔をしている女子高生が写っていた。そして鳩谷は、陽が驚いていることに気付きつつも、雪が深々と降る窓の外を見て遠い目をして話し始める。

鳩「初めてお前と出会った時、正直この目を疑ったよ。……宗光、お前は死んだはずの智香子にそっくりなんだからな。…姿だけじゃない。性格も、血の繋がりや年齢差はともかく神童賢一の姉という事実も、奴を呼ぶ呼称も、幼くして母を亡くしたという境遇も……まるで智香子の代わりなんじゃないかと思うほどにな。」

そして、鳩谷は自嘲気味な顔をして陽を見る。

鳩「しかもお前は、俺の勤める閏台高校に入学したばかりか、俺の持つクラスの生徒になり、さらに部活まで俺の持っているメディア部に入った。そして智香子が死んだ１０年後の今、お前は智香子が死んだ時と同じ１７歳になっている……ここまでくれば、もはや「偶然」では片づけられないだろう？きっと智香子が、賢一に復讐してくれと俺にお膳立てをしてくれたんだよ。」

そう話す鳩谷に、陽はとても聞きにくそうに言う。

陽「あの……」

鳩「なんだ？」

　陽「先生はさっき、智香子さんはヨシくんに殺されたって言ってましたけど……それ、本気で言ってるんですか？」

いぶかしげな表情でそう訊く陽に、鳩谷は無意識にも嫌悪感を顔に見せる。

鳩「何が言いたい？」

陽「だって１０年前って言ったら、あの子はまだ６歳になる年ですよ？そんな子が人を殺すなんて有り得ないじゃないですか……ましてや、あんなに優しい子が、実のお姉さんを……」

信じたくないという感情から言葉を詰まらせる陽を少しの間見て、鳩谷はまた窓の外へと目線を移す。

鳩「有り得ないのは……アイツの存在自体だよ……」

陽「え……」

憎しみに満ちた鳩谷の口調に、陽は悪寒を感じる。

鳩「教えてやるよ。……俺がこの世でただ１人愛した女のことも、その女を奪った挙句に殺した、神童賢一という化け物のこともな。」

そして、鳩谷はケンイチが部員たちに話した話と同じ内容の話を、ケンイチからの電話がかかってくるまで陽に聞かせていたのだった。―

そこまでのことを思い出し、陽は一層悲しそうな顔をした。

陽「（私って、智香子さんの代わりなの、かな……）」

その頃、メディア部の部室では……

「Beheading＝T＞B＞G(at night）＞~~R~~＞B＞~~G~~＞~~R~~＞~~B~~＞~~G~~＞~~R~~……」

ケンイチが裏返した智香子の写真には暗号のようなものが書いてあり、一番左側の「Ｒ」には潰すかのように横線が引かれ、右端に書いてある５つのアルファベットはすべて×でつぶされていた。

ケ「Beheading……だと？」

写真の裏を見てそうつぶやくケンイチを、部員たちが不安そうに見ている。

隆「なんだよ、ビヘディングって……」

ケ「打ち首……」

隆「打ち首ぃ？」

修「う、打ち首って、首を斬る「打ち首」のことですよね……？！」

孝「でも、その打ち首がなんだってんだよ？」

驚く修丸に、冷静に考え込む孝彦。

路「誰かの首を斬れってことか？嫌に物騒だな……」

晶「いやでも、切るってもよ、誰の首を斬るんだよ？」

路「んなもん、わかりませんけど……」

考え込む龍路の隣で、龍海が暗号に指を添える。

海「ねえケンイチさん、これなんですかね。なんか数式みたいだけど……」

そう言われ、ケンイチも暗号をゆっくりとなぞり始める。

ケ「Beheading、＝、Ｔ、＞、Ｂ、＞、Ｇ、カッコ付のat night……それから先のアルファベットについている印はなんなんだ……」

暗号を読みながらいぶかしげにそうつぶやくケンイチ。

海「なんなんだ…って、普通にバツでしょ？」

路「あのな、ケンイチが言ってんのはそうじゃなくて……」

至って真面目な龍海と、珍しく呆れる龍路だったが、そんなことも気にせずケンイチは何かに気付く。

ケ「―！……学年か。」

晶「学年……？」

ケ「Ｔは何なのかわからないが、Ｂ、Ｇ、Ｒは３つセットになっていて、このアルファベットの不等式は、大きな順にＢ、Ｇ、Ｒ、そしてまたＢから繰り返すことを表しているんだろう。」

孝「……そうか、学年カラーか！」

ケンイチの説明に、孝彦がいち早く気付く。

隆「どういうことだよ？」

孝「１番大きいＢはセンパイ方３年生の青…つまりBlueのＢで、次は俺たち２年生の緑、GreenのＧ。んで、その次が１年生の赤でRedのＲってことだと思う。」

修「そっか、今の３年生が卒業したら、次の１年生の学年カラーは青になりますもんね。で、その次の年は緑の１年生が入ってきて……繰り返すってそういう事でしょう？」

ケンイチにそう訊く修丸に、ケンイチは暗号を見たままうなずく。

ケ「ああ。だとすれば、首を斬るのはこの学校の生徒のようだな……不等式の意味を考えるなら、おそらくは学年順に斬れと言うことだろうが……」

その言葉に、修丸が小さく震える。

修「せ、生徒の首を…？！」

そんな修丸に、ケンイチは苛立ちを押さえるように言う。

ケ「バカが、寝言は寝て言え……本当に首を刈ってどうする？」

修「え……？」

晶「じゃあ、どうしろってんだよ？打ち首に他の意味なんて思い当たらないし……―！」

晶の言葉を聞き届けるや否や、ケンイチは苛立たしげに机を叩いた。

晶「お、おい……」

ケ「わかんねーから悩んでるんだろうが……！」

悲痛にそう言い放つケンイチの心境を、部員たちはすぐに察する。

路「落ち着け、ケンイチ！…大丈夫だよ、お前なら落ち着きゃこれくらいすぐに解けるって！」

隆「そうだぞケンイチ！俺らの頭じゃこんな暗号なんてぜってー解けないかもしれないけどよ、お前は天才なんだ！陽を助けられんのはお前だけなんだ！！」

必死にケンイチを励ます龍路や隆平を、ケンイチは珍しく泣きそうな顔をして見ていたが、ふいに自信なさげにうつむいてしまう。

ケ「だが……打ち首の意味だけじゃない！…at nightも、Ｔの意味も―！」

その時、ケンイチは何かに気付く。

ケ「近宮、お前さっきなんて言った？」

隆「え？……えっと、陽を助けられるのは―」

ケ「そうじゃない！……そうか、頭だ！」

隆「な、なんだってんだよ……」

不思議がる隆平に、ケンイチは少しだけ自信を取り戻した顔で言う。

ケ「お前、さっき自分たちの頭では暗号は解けないかもしれない、と言っただろう？……それで気付いた。打ち首というのは頭のこと……イニシャルだ！」

孝「そっか、頭の文字で頭文字、イニシャルって意味になるもんな。」

感心する孝彦をよそに、ケンイチはホワイトボードの前に立ち、左の端に丸を縦に２つ、その上の丸の隣に「Ａ」、下の丸の隣に「Ｈ」、そして「Ａ」の対角線上の右端に「Ｔ」、その下に「Ｓ」と書く。さらには、Ａ側の丸の隣には「名」、Ｈ側の丸の隣には「姓」と書く。

「名○Ａ　　　　　Ｔ

　　姓○Ｈ　　　　　Ｓ」

ケ「おい、お前ら２年生の誕生日を教えろ。」

不思議がる孝彦にケンイチは答えず、ホワイトボードを見たまま全員に質問をする。

路「え…？」

ケ「早く……」

静かにも焦りを感じさせるその言葉に、２年生たちは顔を見合わせる。

路「俺は６月９日だけど……」

隆「俺は来月の３月１４日だぜ？」

孝「１１月１２日だ。」

修「えっと、僕は４月３日です……」

聞きながら、ケンイチはホワイトボードの端にメモを取っている。

「佐武―６/９　近宮―３/１４　幾永―１１/１２　湯堂―４/３　宗光―７/２２」

そして、先ほど書いた２列のアルファベットの間を埋めていく。

「名○ＡＯＴＨＴＲＴ

　　姓○ＨＹＳＭＩＣＳ」

路「これって、もしかしてメディア部の生まれた順のイニシャルか？」

孝「それだったらさ、隆平と龍海の間に賢一のイニシャルが入るんじゃないか？」

路「あ、そっか……」

孝「でも、誕生日を聞くってことはお前の言う通り、俺たちのイニシャルってことだとも思うけど……ってかそもそも、なんでイニシャルを並べるのがメディア部の生徒ってなるんだ……？」

ボードに書かれた文字の並びを不思議がる２人。そして、孝彦は少し遠慮がちにケンイチを見る。それに気付いたケンイチは、少し面倒くさそうに説明する。

ケ「あの暗号、最初のＲには横線だけ、その次のＢには印がなく、それ以降のアルファベットにはすべてバツがついている。逆を言えば、バツがついていないのはＢ、Ｇ、Ｒ、そしてもう１つのＢだ。……バツのついていない４つの文字、その中でも２つめのＢの意味を考えれば、この不等式がメディア部を表していることがわかる。」

路「２つ目のＢ？……！」

少し考え込んだ後、龍路はふと龍海の方を見る。

海「え、なに？」

路「そっか、確かに次の１年生…今の中３と一緒に活動してる部活なんて、うちの学校じゃここしかないもんな！」

納得する龍路を見てから、ケンイチはまたボードの方を見る。

ケ「ああ。そうなると、Ｒにひかれている横線の意味は、部活にはいるが暗号には使わないイニシャル…と考えられないか？」

晶「なるほどな、バツと横線にはそんな意味の違いがあったんだな……だからお前、賢一のイニシャルを書いてなかったのか。」

そう言う晶を見て、ケンイチは小さくうなずいてから再びボードを睨む。そして少しの沈黙の後、苛立たしげに眉をひそめる。

ケ「……ダメだ、これだけじゃ何の意味にもならねえ！」

ボードを見つめて焦るようにそう言い放つケンイチ。

晶「だったら、やっぱりat nightとＴの意味を考えよう？……こういう時こそ、焦ったら負けだ！」

ケンイチの隣に立ってボードを見ていた晶がそう言うと、ケンイチもどこか焦りを残したままではあるが、素直にうなずいた。

ケ「そう、だな……」

そう言って、ケンイチはペンを持っていない左手を上着のポケットに突っ込んだ。

ケ「……！」

自らが取った小さな行動から何かに気付いたケンイチだったが、そのことには誰もまだ気づいていない。

隆「なあ、at nightでなんつー意味だっけ？夜ってのはわかるんだけどよ、atがついたらどうなるんだ？」

修「えーと、atは前置詞だから、普通の文だったら「夜に」って意味になるはずです。」

ケンイチとは少し離れたところでそんな話をしている２人の話に、孝彦も参加する。

孝「夜に、か……。でもなんでＧの隣なんだろうな？……さっきの流れだと、２年生の夜にってことになるのかな？」

その言葉に、ケンイチは何かを考えるように孝彦を見ている。

隆「２年生の夜ぅ？なんだそりゃ？」

孝「んなことまで俺が知るかよ！」

突っかかり気味にそう言う孝彦を見て、隆平はふっとバツの悪そうな顔をする。

隆「まあ、そりゃそーだよな……悪い、何でもかんでも聞き返しちまって。」

自らケンカを回避しようとする隆平の意図に気付き、孝彦も同じような顔をする。

孝「……いや、俺もケンカ腰になって悪かったよ。」

そんな２人を、少しだけ安心するように見ていた龍路だが、すぐに机の上の暗号を見て考え出す。

路「at nightもそうだし、このＴも絶対意味はあるんだよな……」

海「でも、学年じゃないよね？Ｔが付く色なんてないし……それにＴだけ１個しかないのも、何かあるのかなぁ……」

隆「くっそぉ、せめて英語じゃなくて日本語ならなぁ……数学と英語なんて、俺に対するいじめだろ、マジでひどすぎるぜ先生！」

悔しそうにそう言う隆平の言葉に、ボードに目線を戻して睨めっこをしていたケンイチは小さくも反応し、どこか嬉しそうに隆平の方を向く。

ケ「お前も、賢一同様に勉強ができないだけなのかもしれないな。」

隆「へ？」

意味の解っていない隆平に、ケンイチは言う。

ケ「頭の回転の悪さを自負できる奴こそ、実際は直感が豊かなのかもしれない。……お前の言った英語という言葉、たぶん大きなヒントだ。」

修「英語がヒント、ですか？」

ケ「ああ。Ｂ、Ｇ、Ｒが学年、すなわち生徒を表すなら、生徒と関わるＴと言われれば、思い当たるものがある。そしてその答えもさっき近宮は口にしていた。」

晶「…！先生か！」

ケ「ああ。教師は英語でTeacher、すなわちＴが表わすのはメディア部に関わる教師である鳩谷自身のことだろう。…当たっていたらの話ではあるが、英語教師の鳩谷らしい暗号だよ。」

そう言いながら、ケンイチはボードの左端の丸を２つとも消し、上の丸の部分には「Ｔ」、下の丸の部分には小さく「Ｋ」と「Ｈ」と書く。

「名ＴＡＯＴＨＴＲＴ

　　　　　　　　　　　　　Ｋ

　姓　 ＨＹＳＭＩＣＳ

　　　　　　　　　　　　　Ｈ　　　　　　　」

そして、上の段のＨと、下の段のＭを消す。

「名ＴＡＯＴＴＲＴ

　　　　　　　　　　　　　　Ｋ

　姓　ＨＹＳＩＣＳ

　　　　　　　　　　　　　　Ｈ　　　　　　　」

路「おい、なんでＨとＭ消すんだ？」

孝「それがメディア部の生まれ順のイニシャルだったら、ＨとＭって陽のことだろ？」

その問いに、ケンイチはボードの空いているところに「at night」と書きながら言う。

ケ「夜、空に昇るのはなんだ？」

海「月じゃないんですか？」

その答えを聞いて、ケンイチは部員たちの方を見る。

ケ「なら、夜の空にないものは？」

修「あ、太陽！…そっか、陽さんの名前は太陽の陽って書きますもんね！」

晶「夜にってのは、この暗号のイニシャルの中に、太陽……つまり陽の名前を入れないってことか！」

ケ「at nightが２年生…Ｇの隣にあることからしても、間違いないだろう。」

隆「でもお前、もしかしてat nightの意味は最初から気付いてたってのか？」

ケ「いや……」

そう言って、ケンイチはポケットの中から、陽に返そうと思っていたサンストーンを取り出した。

ケ「コイツを持ってきていたことを思い出して、それで気付いた。」

海「なんですか、それ？ビーズ？」

みながケンイチの取り出したサンストーンを不思議がる中、晶は小さくも驚く。

晶「お前、それ陽のサンストーンじゃないか。」

修「え？センパイ、知ってるんですか？」

晶「そりゃ……」

そこまで言って、晶はハッとまずい事を言っていることに気付く。

晶「あ！いや、それはその……」

そう言ってちらりとケンイチを見る晶に、ケンイチはどこかわかっていたかのような、どこか呆れたような顔をする。

ケ「安心しろ、賢一は今、オレが見聞きしてることをいちいち気にできるような状態じゃねえ。」

晶「そっか。」

どこかホッとした晶に、龍海が不思議そうに訊く。

海「あの、それでなんで晶センパイがそのサンストーン？だかってのを知ってるんですか？」

晶「いや、実はな、おととい自分と陽で部活抜けただろ？あれさ、陽が賢一に手作りのブレスレットを作って誕生日プレゼントにしたいからって、そのブレスレットに通す天然石選びを手伝ってやるためだったんだよ。それで陽の奴、そのサンストーンを買ってたんだけど、ほら……そーいうのって賢一には内緒にしとかないとだろ？」

孝「だからあんなに慌てたんですか。」

納得している孝彦だったが、修丸は心配そうな顔をしてケンイチを見る。

修「あの、でもそれって賢一くんは大丈夫なんですか？……その、心が壊れてしまう、とかは……」

その言葉に、ケンイチは表情を曇らせる。

ケ「……わからない。」

隆「わからないって、お前なあ！お前は賢一のことは何でも知ってんだろ？！なのにわからないって……」

感情的になってしまう隆平だったが、ケンイチは申し訳なさそうにうつむく。

ケ「アイツは……賢一は１０年前の出来事を思い出しちまった……賢一はあの記憶を失くしておくことで今まで生きてこれたようなものなのに……」

にわかに、悔しそうに震えだすケンイチ。

ケ「アイツは智香子が死んだことで心に深い傷を負った……賢一を生かすためには、智香子の死を思い出させてはいけなかったんだ。……オレは賢一に死んでほしくなかった……！だから、できるだけアイツと１０年前の記憶の干渉を避けてきたんだ……」

そこまで話して、ケンイチはふっと力を抜いて部員たちの方を見る。

ケ「オレが賢一と入れ替わるようになって、賢一の…お前たちの周りで事件が起きることが増えただろう？……そのすべての事件が、どこかに神童家を連想させるような要素を含んでいた。」

隆「要素…？」

ケンイチは、静かに修丸の方を見る。

ケ「お前が預かってる犬が凶器に使われた、口裂け男の騒動…あの事件の動機は、田代の唯一頼れる肉親であった母親の敵討ちだった。生まれながらに母を亡くし、父から疎まれていた賢一にとって、智香子は唯一の頼れる肉親だ。」

次に、今度は孝彦を見るケンイチ。

ケ「夏休みに起きた事件で、屋畑を犯行に走らせたのは、「いらない存在」という一言……それは、オレ自身のことだとも言えるし、記憶を失う前の賢一がずっと抱えていた不安でもあった。」

次に見られたのは、龍海である。

ケ「お前がトリックの一部をビデオに捉えた事件だって愛情のもつれが原因だったが、親子と男女の違いはあれど、智司の智香子への愛情は、賢一の存在のせいで明らかにもつれていた。」

それからケンイチは隆平を見る。

ケ「お前のおかげで最悪の事態を避けられた梶北の家での事件なんて、親が非の無い子を疎むなど、まさに智司と賢一を見ているようだった。」

それからケンイチが次に見たのは、龍路である。

ケ「写真館の事件…あれは認められない恋愛が招いたものだが、智香子と賢一の関係も、登坂や高須賀と同じく血の繋がった姉弟同士の、認められない恋愛だろう？」

そう言って晶を見たケンイチだったが、晶はケンイチよりも先に口を開く。

晶「ちょっと待てよ……じゃあタクが名取や両瀬を殺したこの前の事件はなんだってんだ？」

ケ「……久島の親は、久島に虐待をしていたと言ったな？」

晶「ああ……―！」

そう言って、晶もケンイチの言いたいことに気付く。

晶「そうか、賢一も父さんから……」

ケ「ああ……虐待、と言えるかはわからないが……生まれてからずっと、賢一は智司からひどい扱いをされ続けていた。」

そして、先ほど同様に泣き出しそうな顔でうつむく。

ケ「どの事件も、まるで賢一に記憶を取り戻させようとしているかのように起きやがった。だからオレは、賢一の直感がそのことに気付く前に事件を解決しようとしてきたんだ。それしか、賢一に生きてもらう方法を知らなかったからな……だから１０年前の記憶が戻った今、１０年前の出来事がまた繰り返されちまった今、賢一がどうなっちまうのか、それはオレにもわからねーんだよ……！」

そんなケンイチに誰も何も言うことができなかったが、ふっと晶が強気な顔をした。

晶「だったら！今出来る事をやりゃいいじゃないか！！」

その言葉に、ケンイチも他の部員も、みな驚いて晶を見る。

晶「戻った記憶はもうどうしようもないかもしれないが、でも、おそらくだけど陽はまだ殺されてなんかいない！同じことはまだ繰り返されてないんだから、止めようだってあるだろうが！」

ケ「だが、今はまだ生かしていると言っても、鳩谷は今日のうちに宗光を殺すつもりなんだぞ？！智香子同様に、賢一の一番大事な存在を―！」

隆「だから！先生が陽を殺しちまう前に陽を助けろってセンパイは言いたいんだよ！…そっスよね？センパイ！」

晶「おうよ！」

隆平に力強く答える晶を見て、他の部員たちもどこか晶に納得するような顔をしてケンイチを見る。

路「それに前に陽も言ってたけど、賢一は過去なんかに負けるほど弱い奴じゃないよ。陽を助けてやれれば、きっと賢一は立ち直れる……んなこと、１年だけ一緒に活動してきた俺らよりも、アイツとずっと一緒のお前が一番わかってるんじゃないのか？」

その言葉に、ケンイチはふと自分の胸に手を当てる。

ケ「……」

孝「とにかくさ、お前が弱気になっちゃ解ける謎も解けないだろ？……陽だって賢一だって、それに俺たちみんなお前を頼りにしてんだぜ？」

修「今は、陽さんと先生の居場所を突き止めることに専念しましょう？…いくら賢一くんが強いと言っても、陽さんにもしものことがあったら元も子もないですから！」

海「そーですよ！ほら、よくわかんない暗号は全部解けたんだから、あと少しでしょ？頑張りましょーよ！」

心の底から自分を励ましてくれる部員たちの気持ちを、ケンイチはおそらく、「ケンイチ」として生まれてから初めて素直に受け止めた。

ケ「そうだ、よな……すまないな、何度も弱気になっちまって……」

うつむいてそう言った後、ケンイチは嬉しさを隠さずに顔を上げる。

ケ「ありがとな。…お前たちがいなかったら、すでに諦めていたかもしれない……」

その言葉を、部員たちも素直に受け止め、どこか照れくさそうな顔をしたり、ホッとしたような表情を浮かべる。そして、ケンイチはホワイトボードを再び見る。

ケ「鳩谷のことだ、自分を教師の英語、Teacherで表すくらいだからな、おそらくこのイニシャルの並びも何かの単語だと思うんだが……」

海「じゃあ、こっちのＫとＨって、先生のことなんですか？」

今更のようにそう訊く龍海だったが、ケンイチは特に嫌な顔はせずにボードを見たままに言う。

ケ「ああ。いちおう楝蛇と鳩谷で考えてはいるんだが……」

修「でも、ＫでもＨでも…あと名前の方でも、こんな単語ありましたっけ……？」

ケ「いや、思い当たる単語は特に…―！」

そう言いつつ、ケンイチはふと鳩谷の苗字のイニシャルを２つとも消し、何を思ったか自分でも半信半疑なペン運びで「Ｐ」と書く。

「姓ＰＨＹＳＩＣＳ」

ケ「そういうことかよ……」

路「……なあ、なんで先生の苗字のイニシャル、Ｐにしたんだ？」

ケ「知らなかったな、あの野郎がそこまで英語にこだわるとは……」

答えにならない答えを、自嘲気味にそう言うケンイチ。

海「いや、だからなんでＰに―」

修「あ…もしかして鳩、ですか？」

ケ「……ああ。」

晶「はあ？」

いぶかしげにそう言う晶に、修丸が言う。

修「ほら、先生の苗字って鳩谷でしょ？それで、鳩って英語にすると「pigeon」で、その頭文字がＰなんですよ。」

晶「はあ……」

納得しているのかしていないのか、わからない口調でそう言う晶だったが、その話を聞いていた隆平が興味をたぎらせてケンイチに訊く。

隆「それでよ！その、Ｐにしたら答えは見えたのか？！」

その答えに、ケンイチは特に表情を変えることもなく言う。

ケ「physics……物理という意味だ。」

隆「物理…？それが、陽の居場所なのか？」

ケ「いや……鳩谷は暗号の答えがオレにとって何を意味するか考えろ、と言っていた。……単純に物理室、なんて答えではないはずだが……」

その話を聞いて、孝彦がふっと思い出したように言う。

孝「物理室といやぁ、確かケンイチが初めて賢一と入れ替わったのも、物理室で起きた事件だったよな。」

修「そうでしたね……寺尾先生が、入試問題の横流しが発覚するのを恐れて、口封じで物理部の篠原さんを殺してしまったあの事件を、ケンイチくんが解決してくれて……」

そんな話をしている部員たちを、ケンイチは信じがたいと言ったような、しかし驚きを隠せないような顔で見ていた。そのことに、ふと龍路が気付く。

路「…ケンイチ？どうしたんだよ……」

ケ「まさか……」

そうつぶやいて、慌てた様子でケンイチはポケットの中に入れていた、賢一が隆平から借りていた携帯を取り出して、急いででボタンを押して耳元に持って行く。

ケ「……。くそっ！」

少しの間応答を待っていたケンイチだったが、焦りといら立ちを隠すことなく「通話終了」のボタンを押す。そして、間髪入れずにまた、違う番号を押して携帯を耳元に運ぶが、結果は先ほどと同じだった。

ケ「鳩谷の野郎……！」

憎々しくそう吐き捨て、ケンイチは思い立ったように部室を飛び出した。

海「あ！ケンイチさん！！」

驚く龍海の声に、物理部で起きた事件のことを話していた部員たちも咄嗟に出入り口を見る。が、すでにそこにケンイチの姿はなく、みな不安そうな顔をするのみだった……